

一志郡一志町片野

片野遺跡発掘調査報告

1985.3

三重県教育委員会

序

本県においては、近畿自動車道建設という大規模プロジェクトが本決まりとなり、その建設に先立って道路敷地内に所在する埋蔵文化財の調査を実施しています。また、この事業と併行して県道の道路改良等の関連事業も推進されていかなければなりません。これらの事業地に内記されている埋蔵文化財は数多く確認されており、本工事に先立つ調査が必要となっております。ここに調査結果を報告する片野遺跡のある一志町周辺は、古代大和国から伊勢国に至る主要な交通の要衝の地にあたり、県内における先進文化の地であることが知られています。

今回の調査は、県道丹生寺・一志線道路改良工事の予定地部分にとどまり、当然のことながら、調査外の土地に遺跡の埋没していることが想定されるため、その保護に今後共、各関係機関の充分なご配慮を願うものであります。

調査に際しては、多大な協力を惜しまれなかった、一志町教育委員会をはじめ、地元片野・姫路地区の方々に深甚の謝意を表する次第であります。

昭和60年3月

三重県教育委員会

教育長 横 田 猛 雄

例 言

1. 本書は、三重県教育委員会が三重県土木部から執行委任を受けて実施した県道丹生寺・一志線道路特殊改良工事に伴う一志郡一志町大字片野字北浦地内に所在する片野遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。

2. 調査は下記の体制で行なった。

調査主体 三重県教育委員会事務局文化課

調査担当 三重県教育委員会事務局文化課

主事 河瀬 信幸

〃 高見 宜雄

〃 上村 安生

技師 吉水 康夫

調査協力 一志町教育委員会

3. 発掘調査後の整理及び報告書作成は河瀬が中心となって行なった。

4. 本遺跡の遺跡標示略記号は4 F K Nで、本書の遺構標示については、下記の略記号によった。方位はすべて真北を用いた。なお、当地域の磁針方位は西偏約6度10分（昭和55年）である。

S B ; 竪穴住居及び掘立柱建物

S E ; 井戸

S K ; 土壇

S X ; その他

S D ; 溝

5. スキャニングによるデータ取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目 次

I	前 言	1
II	位置と歴史的環境	2
III	遺 構	6
	1. 縄文時代の遺構	6
	2. 弥生時代の遺構	7
	3. 古墳時代の遺構	10
	4. 奈良～平安時代の遺構	15
	5. 鎌倉～室町時代の遺構	18
	6. 近世以降の遺構	19
IV	小 結	20

插图目次

- 第1图 遺跡位置图
第2图 遺跡地形图
第3图 小字图
第4图 遺構全体图
第5图 遺構実測图(1) SK52・SX100(北
溝)
第6图 遺構実測图(2) SB21・26~28・38・
64・65・88・91
第7图 遺構実測图(3) SB101・104~106・
108・SX100
第8图 遺構実測图(4) SB107・109
第9图 遺構実測图(5) SB42・43・50・87・
SD86
第10图 遺構実測图(6) SB36・111
第11图 遺構実測图(7) SK8・SE12
第12图 遺物実測图
第13图 遺構平面图

写真图版目次

- PL1 遺跡全景・調査風景
PL2 1区東部・西部
PL3 SB21・2区東部
PL4 SB27・2区西部
PL5 SK29・SD33
PL6 3区東部・SX35
PL7 SB38・42・43
PL8 SD45・SB50・4区東部
PL9 SK59・SB60~65
PL10 SB69・SK73・SB74~76
PL11 SK77・80・SD79
PL12 5区東部・SB85
PL13 SD86・SB87・88
PL14 SB91・101・SX100
PL15 SB104・106・108
PL16 SB109・5区西部
PL17 SD5・SK8
PL18 SE12

表目次

- 第1表 遺跡地名表
第2表 弥生時代竪穴住居一覧表
第3表 古墳時代竪穴住居一覧表
第4表 掘立柱建物一覧表

I 前 言

昨今の公共事業をはじめとする各種開発行為は、その規模の大きさ、速度の早さ等々目を見張るものがある。これらの開発行為に伴ない、地上から姿を消していく文化財の数は少なくない。片野遺跡もその一つで、県道丹生寺・一志線道路特殊改良工事計画予定地内に所在したものである。

この片野遺跡は従来の分布調査等により、中位河岸段丘上の桑畑や茶畑に、縄文時代から室町時代に至る土器片、石器等かなりの遺物が散布していることが確認されていた。そこで県教育委員会では、久居土木事務所立合いの元に、昭和56年11月に遺跡の範囲及び遺物散布の濃密を確認し、県土木部道路建設課に通知した。同年12月に、土木部道路建設課から発掘調査依頼及び発掘通知文書が提出された。

当遺跡の発掘調査は、近鉄大阪線の南沿いに延長

443m、幅10mにわたって予定地内の全域4,430㎡について全面調査をすることとした。その後用地買収完了後、発掘調査を実施する旨合議した。

調査方法は、道路延長が長く、しかも排土の場外搬出が不可能になったので、全線を7つの区に分けて、分割して調査をした。分割した区割を便宜上東より西へA～G区と呼称した。調査は昭和59年5月22日に開始し、調査終了区に次の調査区の排土を置きながら調査を進めるという困難を極めながら、同年12月8日に終了した。

なお、調査にあたっては、県土木部道路建設課、久居土木事務所、中勢教育事務所、一志町教育委員会等各関係機関、並びに地元一志町片野地区、姫路地区の多くの方々の御協力を得た。記して感謝の意を表したい。



第1図 遺跡位置図（1：50,000 〇は城砦跡）（国土地理院 1：25,000 大仰）

Ⅱ 位置と歴史的環境

片野遺跡は、現行政区画上一志郡一志町大字片野字北浦に所在する。一志町は、一志郡のほぼ中央に位置し、町内の北部を1級河川である雲出川が北東に流れている。

雲出川は、三重・奈良両県境にある高見山地三峰山付近に源を発し、北東流して各中小河川を合流させながら伊勢湾に注ぎ、伊勢平野形成の一端をにな

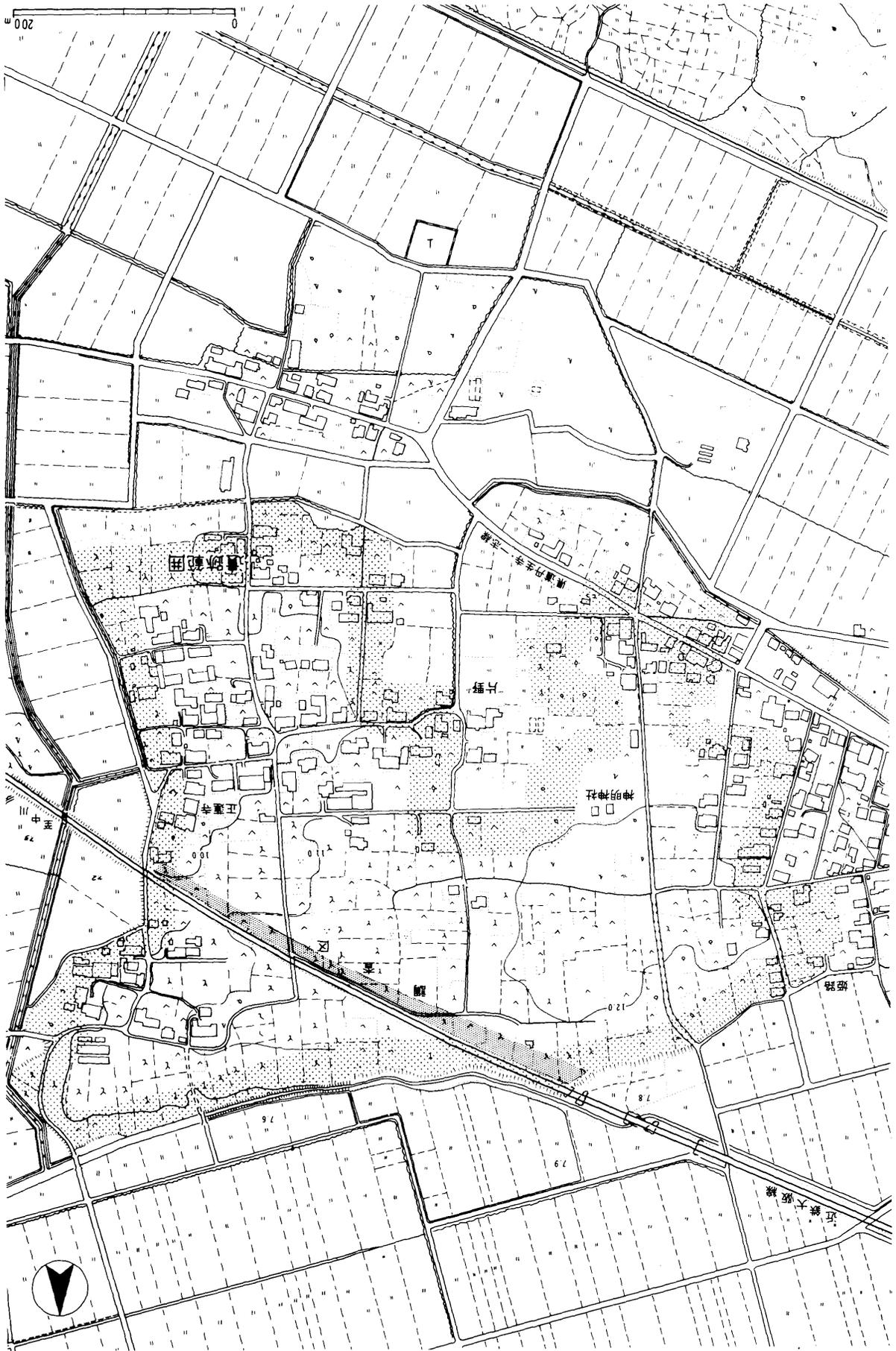
っている。その合流する中小河川に波瀬川がある。一志町南西端の矢頭山に源を発する波瀬川は、町内の中央部を北東に流れ、東端で雲出川に合流し、合流地域一帯に肥沃な沖積低地を形成する。

片野遺跡は、雲出川と波瀬川が合流する肥沃な沖積低地を北に望み、さらに東には、同郡嬉野町の中央部を北東に流れる中村川が、雲出川と合流する地

遺跡番号	遺跡名	時代・その他	遺跡番号	遺跡名	時代・その他
1	下名倉遺跡	先土器(ナイフ・ポイント)	38	小谷古墳群	後期
2	高寺遺跡	〃(ナイフ・石斧)	39	小山古墳群	〃
3	田尻上野遺跡	〃(ポイント)	40	北山口古墳群	〃
4	鹿伏遺跡	縄文(早)	41	木の平古墳群	〃
5	蛇亀橋遺跡	〃(早・中・晩)	42	片平古墳群	〃
6	島田遺跡	縄文以降	43	小山口古墳群	〃
7	薬師寺西遺跡	縄文	44	筒野古墳群	〃
8	下之庄遺跡	縄文・弥生	45	釜生田古墳群	〃
9	上野遺跡	弥生(前・中)	46	上尾土古墳群	〃
10	鳥居本遺跡	〃(前～後)・(飛鳥)	47	杉谷古墳群	〃
11	貝鍋遺跡	〃	48	天保古墳群	〃
12	向川原遺跡	〃	49	原田山古墳群	〃
13	権現前遺跡	〃	50	小谷遺跡	古墳以降
14	権現前西方遺跡	〃	51	西浦遺跡	〃
15	庵門遺跡	〃	52	閉垣戸遺跡	〃
16	松葉遺跡	〃	53	平岩遺跡	飛鳥・奈良
17	高くね遺跡	〃	54	高岡遺跡	〃
18	山神田遺跡	〃	55	平生遺跡	飛鳥以降
19	八田遺跡	〃	56	天花寺廃寺	白鳳以降
20	釜生田遺跡	〃	57	八太廃寺	〃
21	コオノ遺跡	弥生以降	58	一志廃寺	〃
22	郡一遺跡	〃	59	上野廃寺	〃
23	筒野古墳	前期(前方後方墳)	60	嬉野廃寺	〃
24	西山古墳	〃(〃)	61	高寺廃寺	〃
25	向山古墳	〃(〃)	62	天花寺古窯跡	〃
26	高取塚	〃(粘土郭)	63	中野山古窯跡	〃
27	天花寺北古墳群	前期の方墳?も含む	64	堀田遺跡	〃
28	上野山狐塚古墳群	後期(横穴式)	65	北瀬古遺跡	〃
29	上野山古墳群	〃(円墳)	66	上野垣内遺跡	奈良平安
30	丸ヶ谷古墳群	〃	67	庄村遺跡	鎌倉
31	立切古墳群	〃	68	下川原遺跡	室町
32	西出古墳群	〃	69	八反田遺跡	〃
33	ヒジリ谷古墳群	〃	70	八太城跡	〃
34	片野池古墳群	〃	71	小山城跡	〃
35	中野山古墳群	〃	72	天花寺城跡	〃
36	シャレコ古墳群	〃	73	八田城跡	〃
37	赤坂古墳群	〃	74	釜生田城跡	〃

第1表 遺跡地名表

第2区 遺跡地形図 (1:5000)



山古墳^⑥ (25)、筒野古墳^⑦ (23) という3基の前方後方墳をはじめとして、多くの古墳及び古墳群が出現する。

西山古墳は、全長43.6mであるが、盗掘と重機等による破壊のため、主体部や副葬品などの全容や、性格は不明である。現在は、測量図をもとに、復元されている。向山古墳は、全長71.4mで、主体部は粘土槨である。副葬品としては、小型紡製鏡—重圈文鏡・内行花文鏡・変形獣帯鏡—、碧玉製石製品—車輪石・石釧・筒形石製品—があり、現在その大半は東京国立博物館に所蔵されている。尚、その他に、大形鏡1面・刀身・槍身が出土したというが、詳細は不明である。この向山古墳は、昭和50年に国史跡に指定されている。筒野古墳は、「老師君塚」と伝えられ、全長39.5m、主体部は粘土槨である。副葬品として、鏡・石釧・切子玉・管玉などがある。この中でも特に鏡のうち、天王日月獣文帯三神三獣鏡は滋賀県岡山古墳・大分県赤塚古墳・奈良県茶臼山古墳と、そして、波文帯三神三獣鏡は、岐阜県長塚古墳^⑧と、同範鏡の分有関係であることが知られている。以上、3基の前方後方墳の築造年代は、いずれも4世紀後半に求められ、県下では、最も早い時期に属すると考えられている。この様に、前期の古墳が、この地域に集中するということは、当時の畿内政権との政治的関係を考える上で、さらには、その形態の特異性から、この地域の独自性を考える上で、重要な意味を持つと考えられよう。

6世紀後半になると、丘陵上に群集墳が営まれる様になり、一志町から嬉野町を経て、松阪市に至る丘陵上には、多数の古墳、群集墳が分布している。片野遺跡を見下す南西丘陵上には、片野池古墳群^⑨ (34)、中野山古墳群 (35)、小山古墳群 (39)、ヒジリ谷古墳群 (33)、赤坂古墳群 (37) などがある。これらの群集墳は、横穴式石室を持つものが多く、特に、嬉野町の釜生田古墳群 (45) は、県下で最も早い横穴式石室の例と考えられている。また、一志町の上野山古墳群 (29) などには、石棺の出土例も見られ、この地域の大きな特徴となっている。こうした群集墳は、ほぼ7世紀前半まで営まれたと考えられている。

飛鳥・奈良時代の遺跡で、この地域の特徴的な点

は、寺院跡が多いことである。主なものでも一志町には、八太廃寺跡 (57)、高寺廃寺跡 (61)、嬉野町には、天花寺廃寺跡^⑩ (56)、一志廃寺跡 (58)、嬉野廃寺跡 (60)、上野廃寺跡 (59) などが知られ、これらの寺院跡からは、白鳳様式の軒丸瓦等が出土している。また、古窯跡も付近にあり、これら寺院との関係も考えられる。

この時期の他の遺跡としては、一志町に鳥居本遺跡^⑪、高岡遺跡 (54)、平岩遺跡 (53)、嬉野町には、片野遺跡に隣接する平生遺跡^⑫ (55)、堀田遺跡^⑬ (64) などがある。それぞれ、8世紀前葉を中心とする硬質で、内面に暗文をもつ、赤褐色の畿内の要素の強い土師器が出土している。また、平生遺跡からは、円面硯も出土している。これらの寺院跡・遺跡の存在は、雲出川沿いの道が、畿内から伊賀を経て、伊勢、ないしは東国へ至る交通路として利用され、そして、当地域が、その要衝に当り、畿内文化流入の門口であったことを考えさせる。

古代律令制下におけるこの地域は、「和名抄」による伊勢国老師郡に属し、八太郷・日置郷などが置かれたとあり^⑭、さらに、波瀬川右岸には、古代条里制の遺構が残っている^⑮。そして、それをうかがわせる小字名も残っている。さらに、片野遺跡とは隣接する嬉野町宮古地区には、一志郡家、及び一志頓宮^⑯が比定されるなど、この地域が、当時における中心的な地域であったことをうかがわせる。また、神宮領も古代末期になると成立し、八太御蘭・八太御厨^⑰などの名が知られている。

中世に入ると、この地域は、北畠氏の勢力下におかれた。雲出川上流の一志郡美杉村に本拠を置いた北畠氏は、雲出川中流域の丘陵上や、下流域の各要害の地に一族・有力家臣団を配しており、そのため城砦跡が多く残されている。この地域付近にも八太城跡 (70)、小山城跡 (71)、天花寺城跡 (72)、八田城跡 (73)、釜生田城跡 (74) などが点在している^⑱。

この様に、片野遺跡を取りまく周返には、各時代を通じて見るべき遺跡が多い。このことは、片野遺跡を含むこの地域が、地理的・歴史的関係に於いて、重要な地域であったことを物語っていると見えよう。

Ⅲ 遺 構

検出された遺構は、縄文時代の土壇、弥生時代の竪穴住居・溝・土壇・方形周溝墓、古墳時代の竪穴住居・溝・土壇、奈良時代から平安時代の竪穴住居・掘立柱建物・土壇、鎌倉時代から室町時代の溝・井戸、近世以降の掘立柱建物・溝・土壇、などがある。これらの遺構は、東西に細長い発掘区の随所に検出されるが、発掘区の東に行くにしたがって時代は新しくなり、西に行くにしたがって時代は古くなるという傾向が見られる。遺跡範囲は、片野地区の集落を含む広大なものである。しかし、今回の調査は、道路建設部分のみであり、限られた範囲の調査であったが、その遺構密度の濃さから、また、周囲の遺物散布状況から考えると、遺構の広がりや、かなりの広さになることが予想される。発掘区は、標高11m前後のほとんど平坦なものだが、東に行くにしたがってゆるやかに傾斜している。現況は、桑畑が大部分を占める畑地である。

遺跡の基本的な層序は、およそ4層に分かれる。第Ⅰ層は、灰茶褐色の耕作土。第Ⅱ層は、暗灰茶褐色土。第Ⅲ層は、暗茶褐色土。第Ⅳ層は、黄褐色粘質土である。第Ⅱ・Ⅲ層が遺物包含層を形成して

おり、各時代にわたる遺物が含まれている。第Ⅳ層は地山である。基本的な層序は以上であるが、桑畑であるため、桑の抜根などによって、発掘区東側約1/2では、所々攪乱されており、不明確な箇所もある。以下に、各時代の遺構について概述してゆきたい。

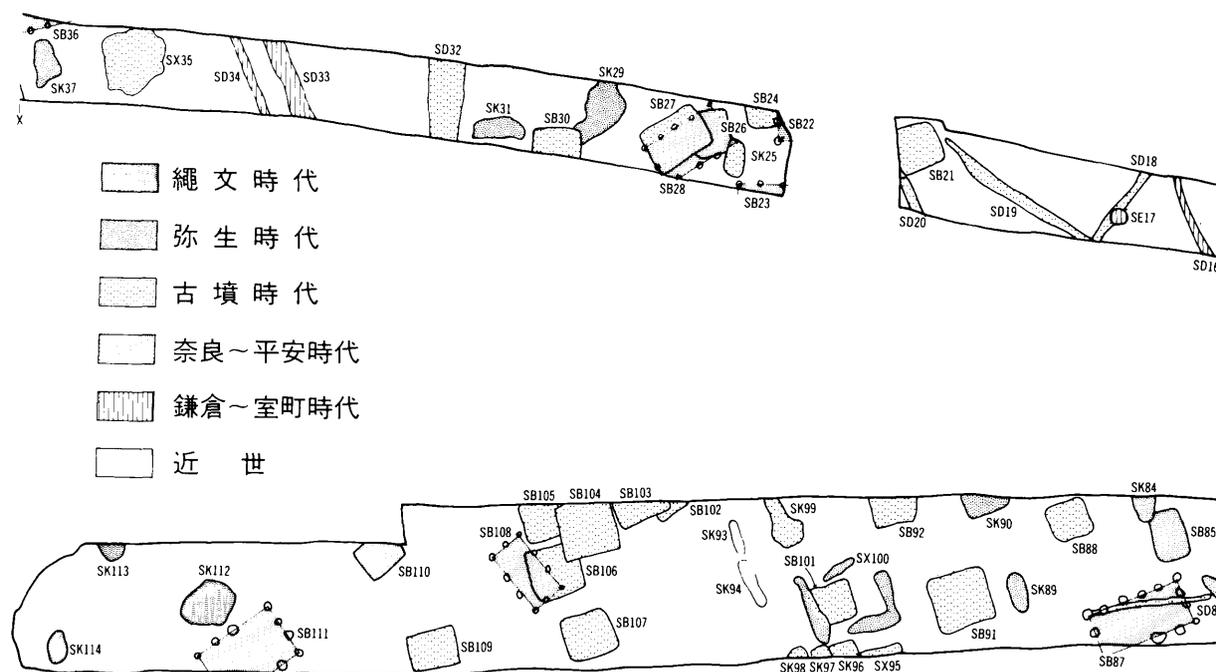
1. 縄文時代の遺構

縄文時代の遺構は、発掘区西端付近に集中しており、3基の土壇がある。

SK 112 発掘区西端から南東へ約14.5mに位置する、長径5.2m、短径4.2m、深さ40～50cmの不定形の土壇である。埋土中に数ヶ所のピットが掘り込まれている。出土遺物として、口縁部直下に二条の突帯を持ち、体部に縄文を施す前期に比定される深鉢がある。

SK 113 発掘区北壁の西端で検出された土壇で、規模は発掘区北壁で切られるため不明であるが、1辺2.0m、深さ10cmの方形と考えられる。前期に比定される鉢が出土している。

SK 114 発掘区西端で検出された土壇で、長径2.8m、短径1.8m、深さ40～50cmの楕円形を呈する。



第4図 遺構全体図

後期に比定される鉢が出土している。

2. 弥生時代の遺構

竪穴住居6棟・土坑25基・溝4条・方形周溝墓1基がある。発掘区は、約 $\frac{1}{3}$ 東の所で南北に走る道路により分断されているが、弥生時代の各遺構は、分断された約 $\frac{2}{3}$ の西側発掘区で検出されており、東側発掘区では検出されていない。竪穴住居は、そのほとんどが重複して検出され、規模はほぼ同じ程度である。また、土坑が多く検出されている。各遺構からの出土遺物は、畿内第3様式を中心とする土器が主体を占めている。

(1) 竪穴住居

SB60~63 西側発掘区の中央やや東寄りでも重複して検出された。SB60は、南北3.5m、東西は、SB61と発掘区南壁で切られているため不明である。深さは10cmであるが、支柱穴と炉跡は確認されなかった。SB61~63の深さはいずれも20cmであり、新旧関係の判別はむずかしかつたが、幸じて各住居を

判別出来る線を検出した。その結果、各住居の新旧関係は、SB61→62→63と判明した。各々の規模は、切り合ったり、発掘区南壁で切られているため不明であるが、SB61は南北4.2m、SB62は南北4.6m(推定)、SB63は東西4.6m(推定)である。いずれも、支柱穴は確認できなかったが、炉跡と考えられる焼土が、SB63の北壁中央やや東寄りに確認された。出土遺物は、第3様式新段階の広口壺や細頸壺・甕片などがある。

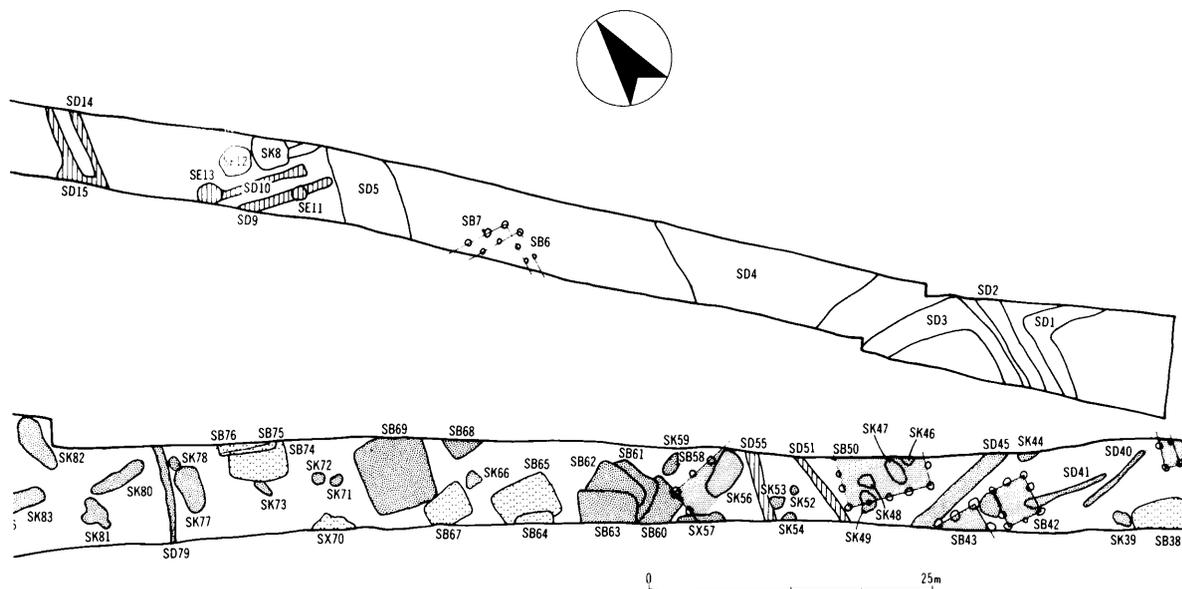
SB68 西側発掘区中央で検出されたが、発掘区北壁で切られるため規模は不明である。深さは10cmで、支柱穴は確認されなかったが、壁際には径45cm、深さ10cmの円形ピットが検出されており、これが南西隅の支柱穴の可能性もある。第3様式の古い段階の広口壺頸部などが出土している。

SB69 西側発掘区中央で検出された住居である。重複が多く、重複関係の判別がむずかしく、中央の東西4.6m、南北6.5mの長方形で、深さ25cmの住居が確認されたにすぎない。支柱穴は、確実なものは確

名称 S B	規 模 (m)		主 柱 柱 間 (m)			深 さ (cm)	概 面 積 (m^2)	炉 址 カマド	周 溝	南 北 軸	備 考
	東 西	南 北	東	西	南 北						
60	—	3.5	—	—	—	10	—	—	—	N79.5° E	
61	—	4.2	—	—	—	20	—	—	—	N65° E	
62	—	(4.6)	—	—	—	20	—	—	—	N68.5° E	
63	4.6	—	—	—	—	20	—	—	—	N34° E	北壁付近に焼土
68	—	—	—	—	—	10	—	—	—	N8° E	
69	4.6	6.5	—	—	—	15	—	—	—	N15° E	南壁西寄りに焼土

第2表 弥生時代竪穴住居一覧表

— 不明 () 推定



認できなかったが、南壁中央に接する所で、長径2.5m、短径2.2mの楕円形で、深さ50cmの土壇をもつ。土壇の北壁直上に、長径60cm、短径30cm、厚さ8cmの表面が平らで、やや磨滅した石が出土しているが、砥石なのかどうかは不明である。また、住居の南壁西寄りに焼土があるが、その性格も不明である。第1様式に比定される甕片や、第3様式の新段階に比定される広口壺の口縁部などが出土している。

(2) 土 壇

出土した土器は、第3様式を中心とするが、第2様式、第4様式のものも含まれている。器種は、広口壺・細頸壺・高杯・甕・鉢などがある。

S K 29 西側発掘区東端から西へ約15mに位置する土壇である。発掘区北壁で切られ、S B 30と重複しているため規模は不明ではあるが、幅は最も広い所で3.4m、最も狭い所で1.8m、深さ40cmの不定形を呈する。広口壺・細頸壺・甕片などが出土している。

S K 31 S K 29より西へ約3.5mで検出された。長径5.3m、短径2.0mの長円形を呈し、深さは50cmである。第3様式の新段階に比定される広口壺片が出土している。

S K 37 S B 38の東隣りで検出された長径4.5m、短径2.0m、深さ10～30cmの不定形な土壇である。甕の破片が少量出土している。

S K 39 S B 38のすぐ西隣りで検出された長径1.8m、短径1.0m、深さ30cmの楕円形の土壇である。広口壺片などが出土している。

S K 44 S D 45から東へ約1.0mで検出された土壇である。発掘区北壁で切られているため規模は不明であるが、短径1.0mの楕円形と考えられ、深さは50cmである。底面直上に、広口壺・細頸壺の口縁・頸部などが出土している。

S K 46 S D 45から北へ約4.0mで検出された。発掘区北壁に切られるため規模は不明であるが、1辺1.2～1.5m、深さ20cmの三角形を呈する。竪穴住居の一部とも考えられる。第3様式の新段階に比定される甕片などが出土している。

S K 47 S K 46のすぐ西に接して検出された長径2.7m、短径1.3mの楕円形を呈し、深さ20cmの土壇である。土壇内中央北寄りに、長辺35cm、短径20cmの表面が人為的に磨滅を受けている石が出土しており、

砥石かも知れない。他の出土遺物には甕片が少量ある。

S K 48 S K 47の西へ約1.5mで検出された土壇で、長径1.5m、短径1.2m、深さ15cmの不定形である。甕片が出土している。

S K 49 S K 48のすぐ南で検出された長径2.4m、短径1.2m、深さ20cmの三日月形を呈する土壇である。ほぼ中央部を、S B 50の南桁行西から2列目の柱穴が掘り込まれている。出土遺物は、底面直上で細頸壺が、5cmほど浮いた状態で広口壺口縁部が出土している。

S K 52 S D 51・52の中間で検出された。1辺70cmの不規則な方形を呈し、深さは10cmである。底面直上に、広口壺・甕が上から押しつぶされた形状でまともって出土した。

S K 53 S K 52の西隣りで検出された1辺1.6mの長方形で、深さは10cmの土壇である。南東隅を他の土壇で、西側をS D 52によって切られている。細頸壺口縁部・鉢・甕片が出土している。

S K 59 S B 60の東に隣接して検出された長径2.3m、短径1.1m、深さ45cmの楕円形の土壇である。第2様式に比定される広口壺の頸部などが出土している。

S K 71 S B 69の西へ約1.5mで検出された土壇である。長径1.1m、短径90cm、深さ25cmの楕円形を呈する。第2様式に比定される広口壺・甕片が出土している。

S K 72 S K 71の西隣りで検出された1辺90cm、深さ15cmの方形を呈する土壇である。第3様式の新段階に比定される広口壺・甕片などが出土している。

S K 73 S B 74の南側中央で切られて検出された土壇で、長径2.0m、短径70cm、深さ65cmの長円形を呈する。出土遺物として、第2様式に比定される広口壺の頸部などが出土している。

S K 77 S B 74の西へ約2.5mに位置する土壇である。長径5.2m、短径2.1mの長円形を呈し、深さは1.3mである。出土遺物は、広口壺・細頸壺・甕の破片など多量で、土壇中で最も多い。

S K 78 S K 77の北に接して検出された長径1.4m、短径80cmの楕円形を呈し、深さは60cmである。S K 77と切り合っているが、新旧関係は不明である。広口壺・細頸壺の口縁・頸部が出土している。

S K 80 S K 78の西側約2.0mに位置する長径5.3

m、短径1.3mの楕円形を呈し、深さは90cmである。出土遺物には、底部穿孔を受けた完形の広口壺2点がある。

SK81 SK80のすぐ西で検出された長径3.3m、短径1.0mの長円形を呈する土坑で、深さは70cmである。このSK81は、長径2.5m、短径1.0m、深さ50cmの長円形の土坑を直交して切っている。第2様式の広口壺の口縁部・甕片などが出土している。

SK82 SK81の北へ約3.7mに位置する土坑で、長径5.5m、短径2.2m、深さ70cmの長円形を呈する。広口壺・甕片などが出土している。

SK83 SK82の南西へ約2.5mで検出された長径3.8m、短径2.5m、深さ30~40cmの不定形の土坑である。壺・甕片が出土している。

SK84 SB85の北西隅と重複して検出された土坑である。発掘区北壁で切られるため規模は不明であるが、短径2.2m、深さ1.0mの不定形な土坑である。広口壺の口縁・頸部などが出土している。

SK89 SB91の東に隣接して検出された長径3.6m、短径1.6m、深さ90cmの長円形を呈する土坑である。壺・甕片が出土している。

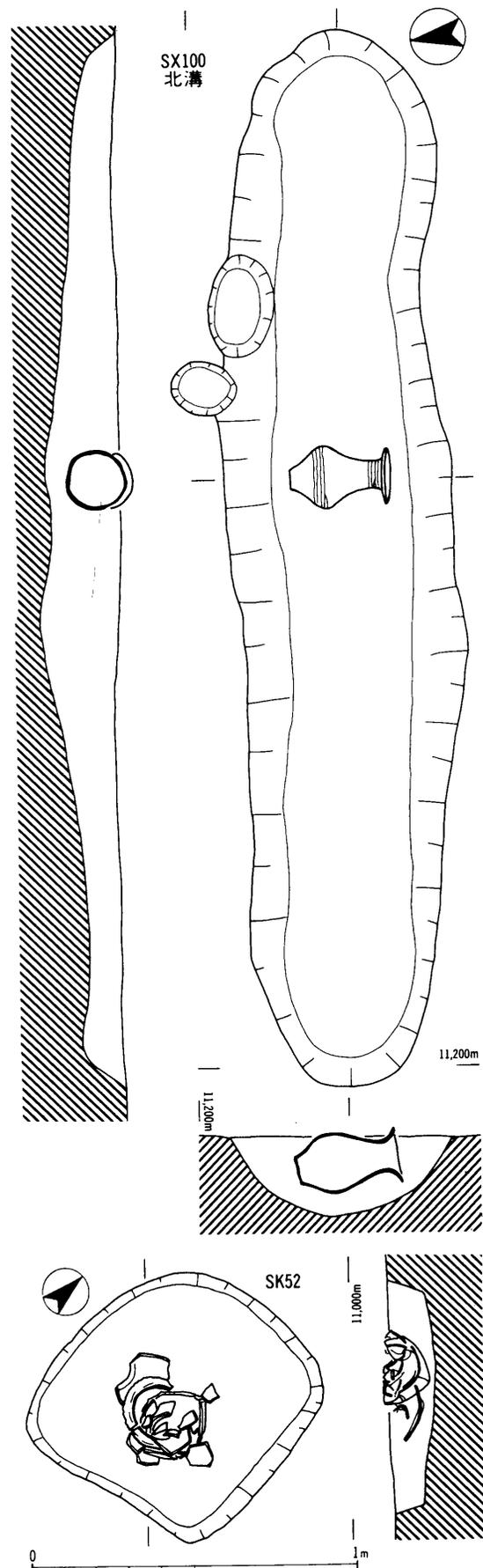
SK90 SK89の北へ約5.5mで検出された土坑である。発掘区北壁で切られているため規模は不明であるが、長径3.9m、深さ90cmの不定形である。広口壺底部・細頸壺頸部などが出土している。

(3) 溝

SD40・41 西側発掘区東端から約 $\frac{1}{4}$ 西に位置する2条の東西の溝である。SD40は幅30~60cm、深さ30cmで、長さは発掘区の北壁付近の土坑によって切られているため不明である。SD41は長さ7.5m、幅50~90cm、深さ40cmであり、溝の西端付近でSB42の東桁行南から2列目の柱穴が掘り込まれている。両溝とも、第3様式の広口壺の底部や細頸壺の口縁部などが出土している。

SD45 SD41から西へ約4.0mに位置する東西に走る溝で、幅1.5m、深さ30~50cmである。発掘区北壁付近で多量の第3様式に比定される広口壺や、大型甕などの破片が出土しており、南壁溝内セクションの中にも甕片がかたまっていた。

SD79 SK77の西側すぐを北東~南西に走る溝で、幅50~90cm、深さ20~30cmである。第3様式に



第5図 遺構実測図(1) (1:20)

比定される細頸壺の頸部や甕片などが出土している。

(4) 方形周溝墓

S X 100 西側発掘区西端から東へ約 $\frac{1}{4}$ に位置する。北溝は長径3.2m、短径80cm、深さ25cmの長円形、東・南溝は1辺4.9m、幅1.2~1.8m、深さ10cmのL字形、西溝は長径6.5m、短径0.6~1.5m、深さ25cmの長円形を呈する。東西の外径は7.8m、内径は5.6m、南北の外径は6.3m、内径は4.2mである。東・南溝は幅の割に浅く、西溝には、S B 101の南西隅の柱穴が掘り込む。陸橋部は北西隅、北東隅、南西隅の3ヶ所にある。盛土はS B 101が掘り込み構築されているので確認出来ず、主体部も確認できなかった。出土遺物は、北溝から第2様式の完形の広口壺が底部から約5cmほど浮いた状態で、溝と直交する形で出土している。

3. 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は、竪穴住居23棟・土壇2基・溝5条・その他5ヶ所である。竪穴住居は、東側発掘区西端に1棟検出されただけで、残りは全て西側発掘区に検出されており、西側発掘区西端から約 $\frac{1}{2}$ 東の地点に集中している。規模は、中型のものと、小型のものが多い。主柱穴が確認されたものは比較的多く、カマド、或いは炉跡をもつものも多いが、周溝をもつものは少ない。また、住居の中央付近に、方形、或いはそれに近い形の比較的浅い土壇を持つものが数棟ある。

(1) 竪穴住居

S B 21 東側発掘区西端で検出された。東西3.9m、南北3.5mのほぼ正方形であるが、発掘区西壁により北西隅を切られる。深さは15cmで、主柱穴は2ヶ所確認でき、径30~50cmの円形で、深さは10~20cmである。北東隅に長径70cm、短径50cm、深さ30cmの貯蔵穴と考えられる土壇がある。また、北壁中央にカマドを持ち、さらに、住居東半分中央の土壇内に焼土が検出されている。出土遺物には、須恵器杯・土師器甕・甗・皿などがある。

S B 24 西側発掘区東端で南西部約 $\frac{1}{4}$ を残し、他を発掘区北壁・東壁によって切られて検出された。深さは20cmであるが、主柱穴は確認できなかった。住居内にS B 22の柱穴が掘り込まれている。土師器

甕片が少量出土した。

S B 26 西側発掘区東端から西約5.0mでS B 27と重複して検出された。東西3.3m、南北4.0mの方形で、深さは15cmである。住居の西側約 $\frac{1}{2}$ をS B 27に切られている。主柱穴は確認できなかったが、北壁中央やや東寄りにカマドをもつ。須恵器・土師器甕片が出土している。

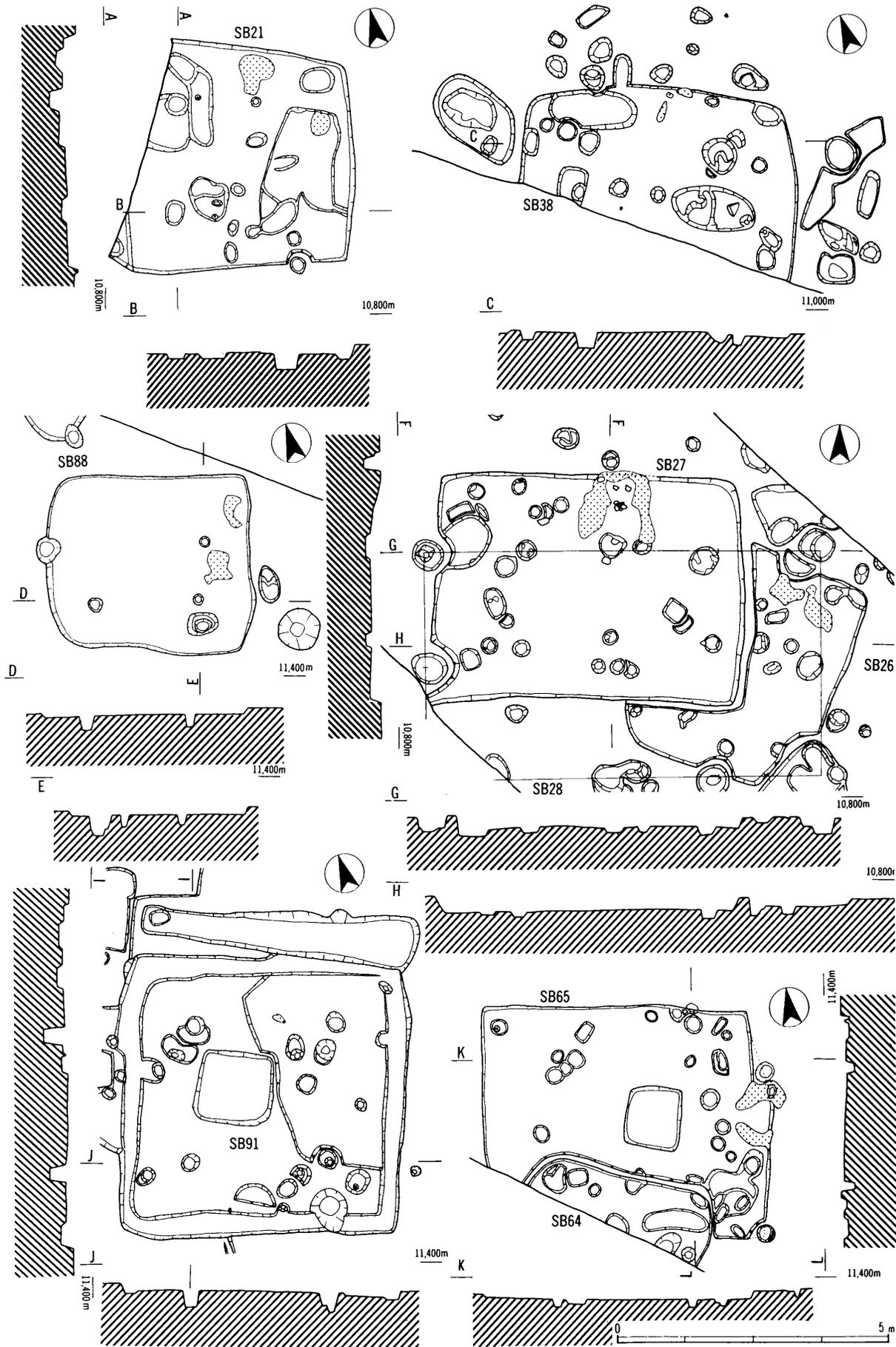
S B 27 S B 26と重複して検出され、S B 26を切り込んでいる。東西5.4m、南北4.0mの長方形で、深さは25cmである。主柱穴は3ヶ所確認され、それぞれ、径25~30cmの円形で、深さは5~10cmである。北壁中央にカマドを持ち、カマド内より土師器甕片がまとまって出土した。その他の出土遺物は、土師器台付甕・高杯などがある。

S B 30 S B 27から西へ約6.0mで、S K 29と重複して検出された。S K 29が埋まった上に構築されており、規模は、約 $\frac{1}{2}$ を発掘区南壁で切られているため不明であるが、東西4.3m、南北は不明で、深さは10cmである。北壁東寄りにカマドを持つ。須恵器壺片・土師器高杯・甕片などが出土している。

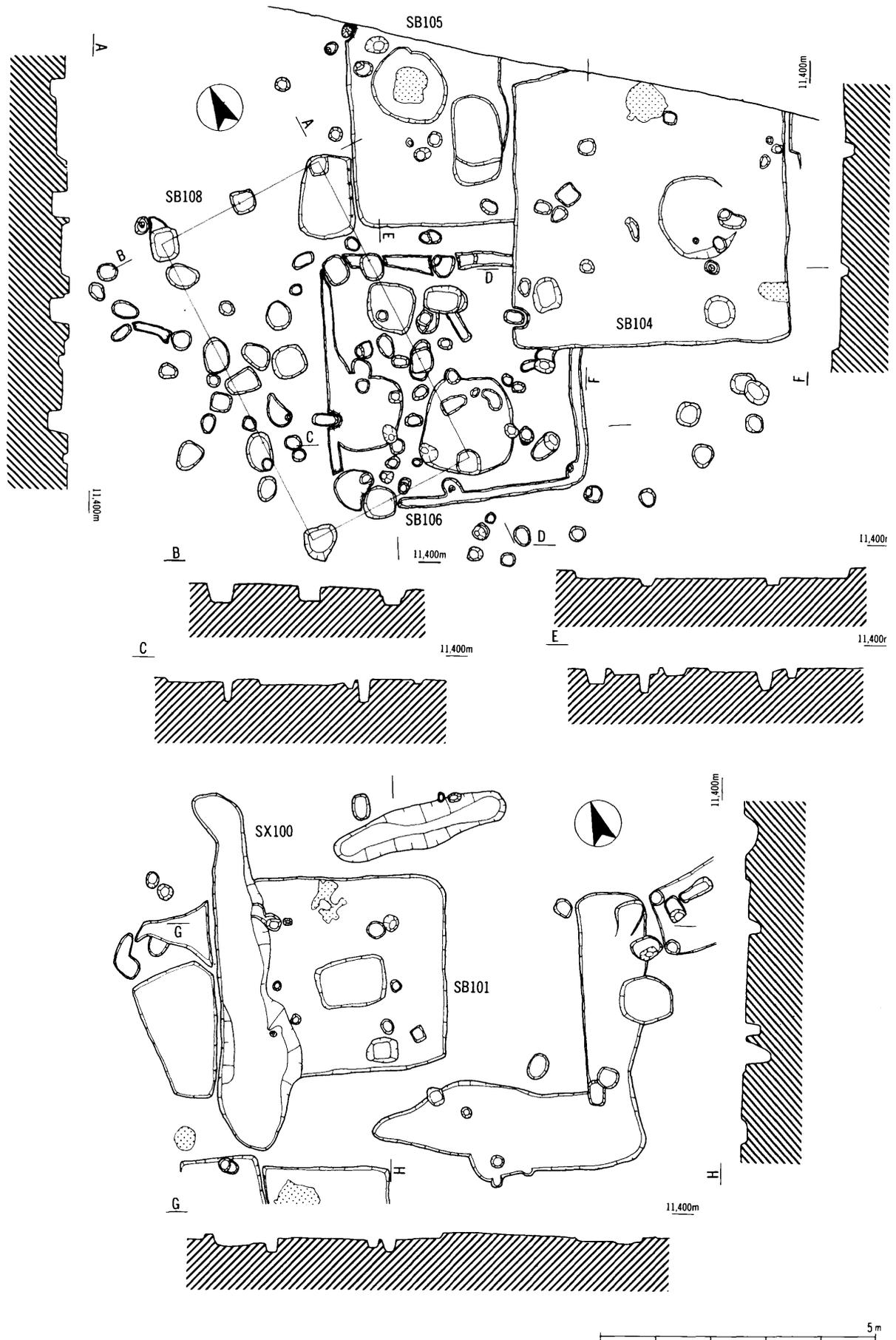
S B 38 西側発掘区東端から約 $\frac{1}{4}$ 西で検出された。東西4.8m、南北は発掘区南壁で切られているため不明である。深さは5cmと浅いが、主柱穴は2ヶ所確認でき、径30~40cmの円形で、深さは20~30cmである。北壁中央にカマドをもち、北西隅に貯蔵穴と考えられる長径1.6m、短径70cm、深さ15cmの楕円形の土壇がある。須恵器杯などが若干出土している。

S B 64 西側発掘区中央やや東寄り、S B 65と重複して検出され、S B 65を切り込んでいる。規模は東西3.3m、南北は発掘区南壁で切られているため不明である。深さは12cmで、主柱穴は確認できなかった。須恵器片・土師器甕片が少量出土している。

S B 65 S B 64と重複して検出され、S B 64によって住居南側を切り込まれている。東西4.9m、南北4.1mの長方形で、深さは12cmである。主柱穴は3ヶ所確認され、径20~25cmの楕円形で、深さは15~20cmである。東壁中央にカマドがあり、南東隅に1辺90cmの不定形で深さ50cmの貯蔵穴と考えられる土壇があるが、出土遺物は少量であった。住居中央東寄りに1辺1.0~1.2m、深さ20cmの土壇をもつ。出土遺物は他に須恵器片・土師器片などがある。



第6図 遺構実測図(2) (1:100)



第7図 遺構実測図(3) (1:100)

S B 67 S B 65から西へ約1.9 mで検出された。東西3.7m、南西3.1mの長方形で、深さは10cmであるが、南西隅を発掘区南壁によって切られている。支柱穴は確認できなかったが、住居中央南寄りに長径1.6m、短径1.2m、深さ10cmの不定形の土壇がある。土師器甕片などが出土している。

S B 74~76 S B 69から北西へ約5.5 mで重複して検出された。S B 74の規模は東西5.1mであるが、南北は、発掘区北壁により切られるため不明である。深さは10cmであるが、支柱穴は確認できなかった。出土遺物としては、土師器壺・高杯片などがある。S B 75は、S B 74を切り込んでおり、規模は東西5.0 mであるが、南北は、発掘区北壁により切られ不明である。深さは15cmある。S B 76は、規模については全く不明であるが、深さは20cmあり、古式土師器壺・土師器甕・高杯などが出土している。

S B 88 西側発掘区西端から約 $\frac{1}{2}$ 東の発掘区北壁付近で検出された。東西3.6m、南北3.2m、深さは15cmの方形である。支柱穴は3ヶ所確認され、径15~25cmの円形で、深さは10~20cmである。カマド跡と考えられる焼土が東壁中央付近にあり、さらに、それとは別に北東隅にも焼土がある。南東隅に長径

55cm、短径40cm、深さ30cmの方形の貯蔵穴と考えられるピットがあるが、出土遺物は少ない。カマド跡と考えられる焼土内から、土師器台付甕・高杯、須恵器杯などが出土している。

S B 91 S B 88から西へ約7.0 mで検出され、東西5.0m、南北5.1mのほぼ正方形である。深さは20 cmで、4周に幅25~50cm、深さ4~8 cmの周溝がめぐっている。支柱穴は4ヶ所確認でき、径30cm、深さ30~40cmである。住居中央やや西寄りに1辺1.3~1.4m、深さ20cmの方形の土壇がある。カマド跡は確認出来なかったが、北壁中央付近に焼土が検出されている。住居の東側半分近くを掘り込んでいる土壇があるが、それが他の竪穴住居の重複なのかは不明である。出土遺物は、南側周溝直上で土師器甕が、その他では須恵器杯・蓋などがある。

S B 92 S B 91から北へ約5.5mで検出された。規模は、東西3.7 m、南北は発掘区北壁により切られていて不明である。深さは5 cmと浅く、支柱穴は確認できなかった。カマドは東壁にあり、ほぼ東壁中央にあると考えられる。南東隅の壁際にも焼土があるが、住居に伴うものかどうかは不明である。発掘区北壁により切られているが、住居のほぼ中央にあ

名称 S B	規 模 (m)		支柱柱間 (m)		深 さ (cm)	概面積 (m^2)	カマド	周 溝	南北軸	備 考
	東 西	南 北	東 西	南 北						
21	3.9	3.5	—	1.9	15	13.7	北 壁	—	N16.5° E	貯蔵穴、土壇内に焼土
24	—	—	—	—	20	—	—	—	N29.5° E	
26	(3.3)	4.0	—	—	15	(13.2)	北 壁	—	N24° E	
27	5.4	4.0	3.4	2.5	25	21.6	北 壁	—	N 6.5° E	
30	4.3	—	—	—	10	—	北 壁	—	N36.5° E	
38	4.8	—	2.7	—	5	—	北 壁	—	N24.5° E	貯蔵穴
64	3.3	—	—	—	12	—	—	—	N25° E	
65	4.9	4.1	2.5	2.2	12	20.1	東 壁	—	N 9° E	中央部東寄りに方形土壇
67	3.7	3.1	—	—	10	11.5	—	—	N10° E	中央部南寄りに方形土壇
74	5.1	—	—	—	10	—	—	—	N28° E	
75	5.0	—	—	—	15	—	—	—	N26° E	
76	—	—	—	—	20	—	—	—	N24° E	
88	3.6	3.2	2.0	1.0	15	12.9	東 壁	—	N16.5° E	貯蔵穴
91	5.0	5.1	2.5	2.5	20	25.5	—	4 周	N20.5° E	中央部に方形土壇、中央北寄りに焼土
92	3.7	—	—	—	5	—	東 壁	—	N21° E	中央部に方形土壇、南東隅壁に焼土
101	(4.0)	3.5	2.2	1.8	10	(14.0)	北 壁	—	N20.5° E	中央部に方形土壇
102	—	—	—	—	10	—	—	—	N 3° E	
103	—	—	—	—	15	—	西 壁	—	N14.5° E	
104	5.0	5.0	2.2	2.2	15	25.0	北 壁	—	N25.5° E	カマド内に支柱石、南東隅壁に焼土 南東隅支柱穴底に径約10cmの根石
105	—	—	—	—	10	—	西 壁	—	N21° E	カマド内に支柱石
106	4.6	4.6	2.5	2.2	—	21.2	—	4 周	N19° E	中央部南寄りに方形土壇
107	4.5	4.0	2.1	2.2	8	18.0	北 壁	—	N19.5° E	貯蔵穴
109	4.2	3.4	2.0	1.9	15	14.3	北 壁	—	N23° E	

第3表 古墳時代竪穴住居一覧表

—不明 () 推定

たると考えられる所に、1返1.6m、深さ15cmの方形の土壇がある。カマド内から土師器甕が出土している。

S B101 S B91から西へ約6.5mで検出され、S X100と重複している。S X100を掘り込み削平して構築されたと考えられる。東西4.0m(推定)、南北3.5m、深さ10cmの方形である。支柱穴は4ヶ所確認でき、その内3ヶ所は径25cm前後で、深さは20~30cmであるが、南西隅の支柱穴は径16cm、深さ20~30cmで、S X100の西溝の中に掘り込まれている。北壁中央にカマドを持ち、住居中央に長径1.3m、短径90cmで、深さ20cmの土壇をもつが、出土遺物は少ない。カマド内から、土師器甕・椀などが出土している。

S B102・103 S B92から西へ約16mの発掘区北壁付近で重複して検出されたために両者とも規模は不明である。S B102をS B103が切り込んでいる。S B102の深さは10cm、S B103の深さは15cmである。S B103の西壁付近に焼土があり、カマド跡と考えられる。出土遺物は、須恵器片・土師器甕片が少量出土している。

S B104 S B103の西に隣接し、S B105・106と重複して検出された。1辺5.0mの正方形であるが北東隅を発掘区北壁で切られている。深さは15cmで支柱穴は3ヶ所確認できる。径25~35cmの円形で、深さは10~15cmであり、そのうち、南東隅の支柱穴の底には、径約12cmの根石がある。北壁中央にカマドがあり、内部には支柱石が残っており、焼土内から土師器甕が出土している。南東隅にも焼土があるがその性格は不明である。その他、出土遺物として土

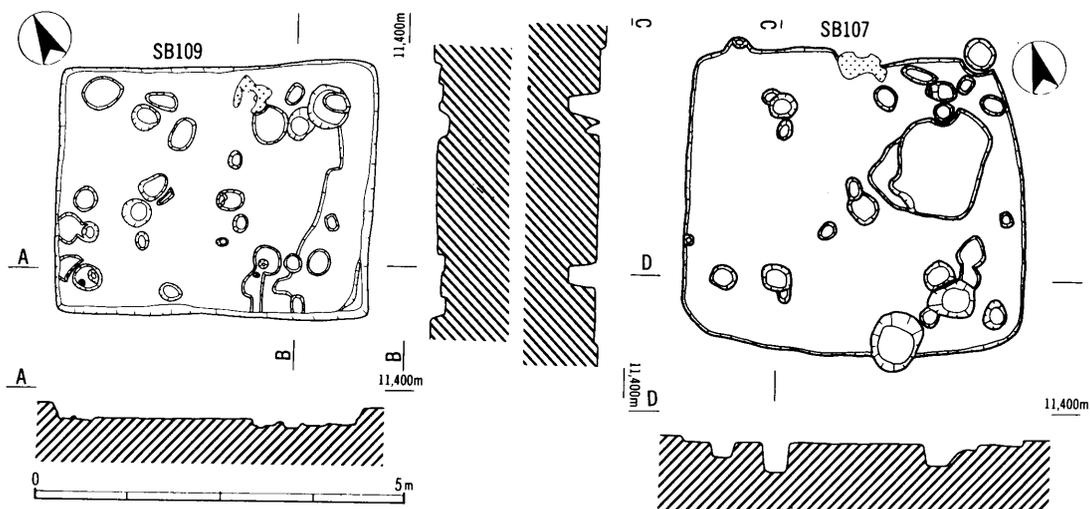
師器片、須恵器片などがある。

S B105 S B104と重複して検出されたが、S B104と発掘区北壁により切られているため全体規模は不明である。深さは10cmで、西壁付近にカマドがあり、内部に支柱石が残っている。カマド内より、土師器甕片が出土している。

S B106 S B105の南に隣接して検出され、S B104に北東隅を切られている。1辺4.6mの正方形であるが、削平がはげしいため、幅平均20cm、深さ8cmの周溝と支柱穴、及び土壇を残すのみである。支柱穴は4ヶ所確認され、径は20~35cmの円形で、深さは40cmである。住居の中央南寄りに1辺1.6~1.7mの方形で、深さ10cmの土壇があるが、出土遺物は土師器甕片など少量である。

S B107 S B106の南約2.0mで検出された東西4.5m、南北4.0m、深さ8cmの方形である。支柱穴は4ヶ所確認でき、径25~35cmの円形で、深さは30~40cmである。カマドは北壁中央にあり、焼土内より土師器甕片が出土している。住居北東部に、1辺1.5mの不規則な方形で、深さ20cmの貯蔵穴と考えられる土壇があるが、出土遺物は少ない。その他では、須恵器片などが出土している。

S B109 S B107の西へ約9.0mで検出された。東西4.2m、南北3.4m、深さ15cmの長方形である。支柱穴は3ヶ所確認でき、径25~35cmの円形で、深さは10~20cmである。北壁やや東寄りにカマドを持ち焼土内から土師器甕が出土している。その他、出土遺物は須恵器甕・杯身・蓋などがある。



第8図 遺構実測図(4) (1:100)

(2) 土 塚

S K 25 S B 26と重複して検出され、S B 26を切り込んでいる。長径3.0m、短径1.7m、深さ10cmの長方形を呈する土塚である。土塚の北辺付近に、S B 28の南東隅柱穴が掘り込まれている。須恵器片、土師器甕片が少量出土している。

S K 99 S B 92から西へ約6.0mで検出された土塚である。規模は、発掘区北壁により切られているため不明であるが、短径は最大で3.0mあり、深さは20cmである。須恵器甕片、土師器甕片などが出土している。

(3) 溝

S D 18 S B 21から南東へ約16mで検出された南西～北東に走る溝である。幅60～90cm、深さ20～30cmで、発掘区南壁でS D 19とほぼ直角に交差し、溝中央南西寄りをS E 17が掘り込んでいる。土師器片が少量出土している。

S D 19 S B 21の東側中央から南東へ走る溝である。幅0.4～1.2m、深さ20～30cmで、中央部がふくらみ、所々で土塚に掘り込まれているが、発掘区南壁でS D 18とほぼ直角に交差する。出土遺物は、須恵器瓶・杯身、土師器甕片などがある。

S D 20 S B 21のすぐ西側を南北に走る溝で、幅90cm、深さ30cmである。わずかではあるが、S B 21と重複しているが新旧関係は不明である。土師器片が少量出土している。

S D 32 西側発掘区東端から西へ約29mで検出された南西～北東に走る溝である。溝の東側は段がついているが、V字形の大溝で、幅2.4～3.2m、深さ90cmである。人為的に掘削されたものか、自然流路なのかは不明であるが、いずれにしても、区画のためのものである可能性がある。出土遺物は比較的少なく、須恵器杯身と土師器甕の破片がある。

S D 86 S B 88から南へ約5.5mで検出された東西の溝である。長さ11.5m、幅50～60cm、深さ10～20cmである。S B 87の北桁行西2列の柱穴が、溝の西端を掘り込んでいる。須恵器杯身などが出土した。

(4) その他

S X 35 S B 38から東へ約7.5mで検出された東西5.5m、南北4.5m、深さ10～15cmの不規則な方形を呈している。底面は北西隅を除いて礫まじりの砂質土である。北辺の中央に、長径1.2m、短径70cm、深さ

50cmの土塚があるが、出土遺物は少ない。中央部南寄りには焼土が検出されているが、カマド跡か炉跡なのかは不明である。この遺構のもつ性格は不明であるが、竪穴住居の可能性もある。出土遺物は比較的少なく、須恵器杯蓋などがある。

S X 95～98 S X 94のすぐ南で検出されたが、各々の規模は、発掘区南壁で切られているため不明であるが、深さはS X 95が20cm、S X 96が10cm、S X 97が12cm、S X 98が5cmである。重複関係が明確なのはS X 96とS X 97であり、S X 97が新しい。S X 96に焼土があるために、これらのS X群は竪穴住居かも知れない。いずれも、土師器甕片が少量ずつ出土している。

4. 奈良～平安時代の遺構

奈良～平安時代の遺構は、竪穴住居2棟・掘立柱建物11棟・土塚1基である。各遺構とも西側発掘区で検出されており、東側発掘区では検出されていない。竪穴住居は、わずかに2棟であるが、それぞれ掘立柱建物に隣接している。掘立柱建物は、2棟と西側発掘区東・南壁により切られている規模不明の2棟とを除いて、全て東西棟か或いは東西棟に近いと考えられる。

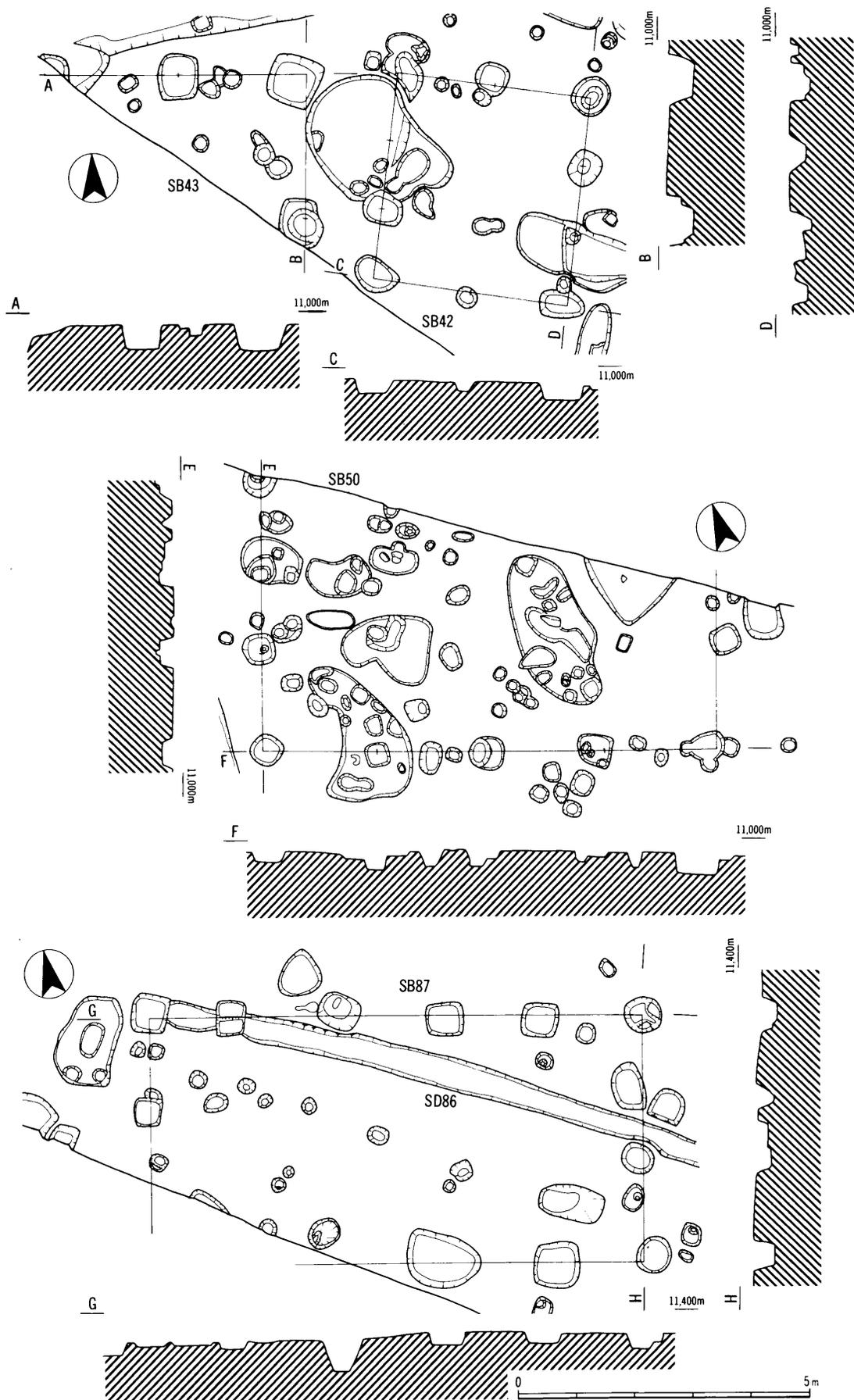
(1) 竪穴住居

S B 85 S B 109から北へ約5.5mで検出され、東西3.0m、南北3.6m、深さ15cmの長方形である。主柱穴は確認できなかったが、東壁中央やや北寄りにカマド跡と考えられる焼土がある。また、中央部に長径1.0m、短径80cmの不規則な方形で、深さ25cmの土塚がある。出土遺物は、土師器皿などがある。

S B 110 SB109から北へ約5.5mで検出された。東西3.8m、南北3.2m、深さ10cmの方形である。主柱穴は、それと考えられるものが1ヶ所あり、径25～30cmで、深さは10cmであるが、断定はできない。東壁付近にはカマド跡と考えられる焼土がある。土師器皿などが出土している。

(2) 掘立柱建物

S B 22 S B 24と重複する形で検出された。全体規模は発掘区北・東壁で切られるため不明であるが、柱間は桁行（推定）1.8mで、柱穴は1辺60cmの方形で、深さは30cmである。梁行が不明なため柱列の可



第9図 遺構実測図(5) (1:100)

能性もある。

S B 23 S B 22から南西へ約3.5mで検出された。発掘区東・南壁により切られているため全体規模は不明であるが、柱間は桁行（推定）2.1mである。柱穴は径40～60cmの円形で、深さは15～30cmである。これも梁行が不明なため柱列の可能性もある。

S B 28 S B 23から北へ約2.5mで、S B 26・27を掘り込み検出された。4×2間の東西棟で、桁行7.2m、梁行は4.2mである。柱間は桁行1.8mの等間で梁行は2.1mである。柱穴は50～60cmの円形で、深さは30cmである。

S B 36 西側発掘区東端より約 $\frac{1}{4}$ 西で検出された。3間以上×1間以上の東西棟と推定されるが、発掘区北壁によって切られるため全体規模は不明である。柱間は桁行1.2m+1.8m×3で、梁行は2.1mである。西側梁行に廂がつくと考えられる。

S B 42 S B 36から西へ約11.5mで検出された。3×2間の南北棟であり、桁行3.6m、梁行3.2mである。柱間は桁行1.2m、梁行1.6mの等間である。柱穴は、径60～80cmの円形・楕円形など不揃いで、深さは20～30cmである。柱穴の内、北東隅の柱穴には、割合はっきりした痕跡が残っており、南側梁行中央の柱穴は、径40cm、深さは15cmと小さい。規模から考えると倉庫と推定される。

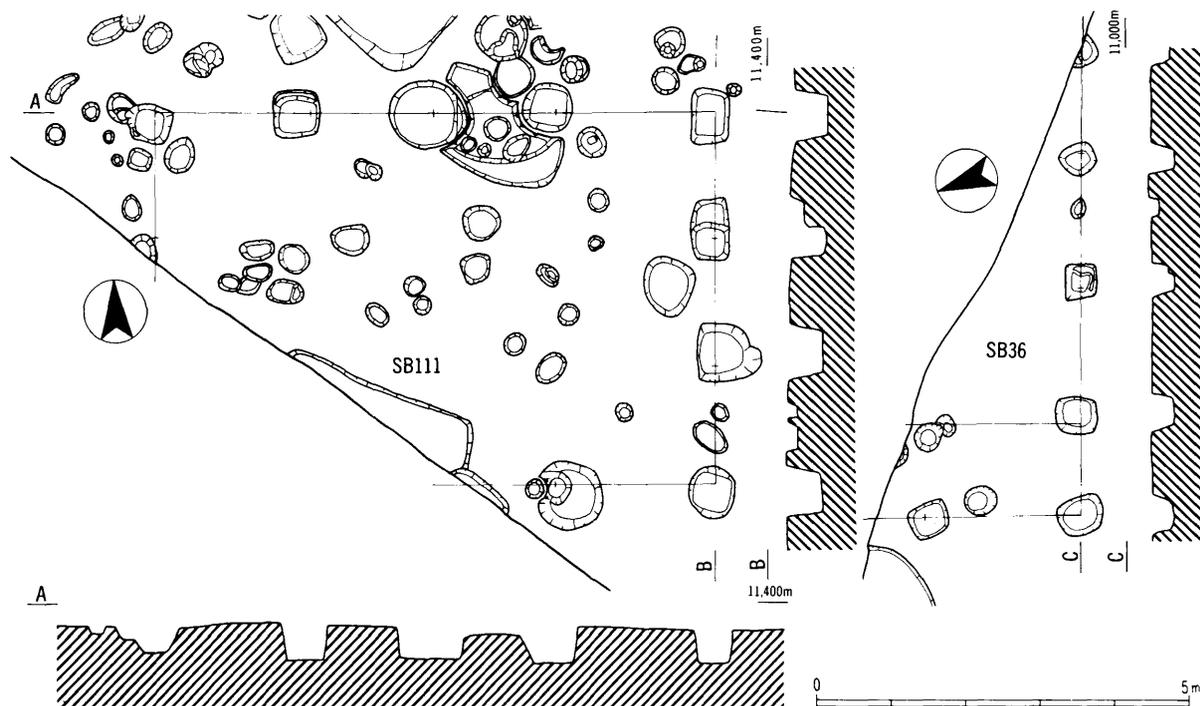
S B 43 S B 42の西に隣接して検出された建物で

2間以上×1間以上の東西棟と推定されるが、発掘区南壁で切られているため全体規模は不明である。柱間は桁行2.1m、梁行2.4mである。柱穴の規模は1辺70～90cmと大きめの方形で、深さは40cmである。北桁行東から3列目の柱穴は、S D 45に掘り込まれており、東梁行北から2列目の柱穴には柱痕跡が残っている。

S B 50 S B 43から北へ約3.5mで検出された4×3間以上の東西棟と推定されるが、発掘区北壁で北東部を切られている。桁行7.8m、梁行4.5m以上で、柱間は桁行1.95m、梁行1.5mの等間である。柱穴は40～60cmの方形、及び円形に近い形など不揃いで、深さは10～30cmである。

S B 58 S B 50から西へ約9.0mで検出された建物である。発掘区北・南壁によって切られているため全体規模は不明であるが、3間以上×1間以上の東西棟と推定され、桁行は6.3m以上ある。柱間は桁行2.1mの等間で、梁行2.1mである。柱穴は1辺60～80cmの方形であるが、南桁行の柱穴は確認できなかった。

S B 87 西側発掘区西端から約 $\frac{1}{3}$ 東で検出された5×3間の東西棟である。桁行8.4m、梁行4.2mで柱間は桁行1.2m+1.8m×4で、梁行は1.1～1.4mの不等間で、西側梁行に廂をもつと考えられる。柱穴は径50～60cmの円形や、1辺50～60cmの方形、長径1.3m、短径1.0mの楕円形など不揃いで、深さは10～30cmである。地山面が西に向ってゆるやかに傾



第10図 遺構実測図(6) (1:100)

斜しているために、北桁行の柱穴は浅くなっているが、西から3列目の柱穴は、他と比較すると深く50cmである。また、西から2列の柱穴はSD86を掘り込んでいます。

SB108 西側発掘区西端から東へ約45mで、SB106と重複して検出された。3×2間の南北棟で、桁行6.0m、梁行3.2mである。柱間は桁行2.0mの等間、梁行1.6mで、柱穴は径40～60cmの円形・楕円形、1辺40～60cmの方形といった不揃いである。柱穴の深さは30cmであるが、東桁行南から3列、南梁行東から2列は、SB106を掘り込んでいます。

SB111 西側発掘区西端近くで検出された建物で、4×3間の東西棟であるが、発掘区南壁で南西隅を切られている。桁行が7.5m、梁行5.0mで、柱間は桁行2.1m+1.8m×3で、梁行は1.7mの等間である。柱穴は1辺60～80cmの方形や、径60～80cmの円形など不揃いであり、深さは40cmである。西側梁行に廂がつくと考えられる。

(3) 土 壇

SK56 SD55の西に隣接し検出された土壇で、SB58と重複する形となっている。長径4.0m、短径1.5mの不定形で、深さは20cmである。出土遺物として、須恵器甕底部・薬壺蓋、土師器皿などがある。

5. 鎌倉～室町時代の遺構

鎌倉～室町時代の遺構としては、溝9条・井戸3基がある。溝は、東西に走る2条を除き、全て南北に走っている。また、その内の2条を除くと、規模に大差はない。井戸は全て素掘りで、底に井筒などは認められない。

(1) 溝

SD9・10 東側発掘区西端から約1/3東で検出された東西に並行して走る溝である。SD9は幅1.0m、深さ1.5～20cmで、SD10は幅0.6～1.0m、深さ10～15cmで、途中浅くなるが、ともに東側を南北に走るSD5に流れ込む形となっている。また、SD9をSE11が、SD10をSE13が掘り込んでいます。両溝間の幅は平均1.0mである。いずれも、山茶碗などが出土している。

SD14・15 SD10から西へ約8.0mで検出された南北に並行して走る溝である。SD14は幅50～60cm、深さ40～60cmで、SD15は幅0.8～3.5mと発掘区南壁付近で大きく広がりを持ち、深さは40～60cmである。両溝間の幅は広い所で、平均1.3mである。出土遺物として、山茶碗片・土師器片などがある。

SD16 SD15から西へ約5.5mで検出された南北に走る溝で、幅60～70cm、深さ20～40cmである。山茶碗片などが少量出土している。

SD33・34 SD32から西へ約11mで検出された南北に並行して走る溝である。SD33は幅1.5m、深さ20cmで、中央東側で他の土壇を切り込んでおり、SD34は幅80cm、深さ10cmである。両溝間の幅は2.0mである。山茶碗、土師器片などが出土している。

SD51 SB50のすぐ西側で検出された南北に走る溝である。幅70cm、深さ20cmである。出土遺物は山茶碗片などがある。

SD55 SD51から西へ約4.5mで検出された南北に走る溝で、幅80cm、深さ25cmである。発掘区南壁付近で、SK53などの土壇を切っている。山茶碗片、土師器片などが少量出土している。

名称 SB	規 模	柱 間 (m)		桁 行 (m)	梁 行 (m)	棟 方 向	備 考
		桁 行	梁 行				
6	2以上×1以上	(1.8)	(2.3)	(3.6以上)	(2.3以上)	(N90°E)	
7	2以上×2以上	(1.8)	(2.3)	(3.6以上)	(4.6以上)	(N85°E)	
22	——	(1.8)	——	——	——	(N33°E)	柱列?
23	——	(2.1)	——	——	(4.2以上)	(N55°E)	柱列?
28	4×2	1.8	2.1	7.2	4.2	N88.5°W	
36	3以上×1以上	(1.2+1.8×3)	(2.1)	(6.6以上)	(2.1以上)	(N89°E)	西側妻に廂
42	3×2	1.2	1.6	3.6	3.2	N12.5°E	
43	2以上×1以上	(2.1)	(2.4)	(4.2以上)	(2.4以上)	(N86.5°W)	
50	4×3以上	1.95	1.5	7.8	4.5以上	N68°W	
58	3以上×1以上	(2.1)	(2.1)	(6.3以上)	(2.1以上)	(N88°W)	
87	5×3	1.2+1.8 4	1.1～1.4	8.4	4.2	N78.5°W	西側妻に廂
108	3×2	2.0	1.6	6.0	3.2	N1.5°W	
111	4×3	2.1+1.8×3	1.7	7.5	5.0	N87°W	西側妻に廂

第4表 掘立柱建物一覧表

—— 不明 () 推定

(2) 井戸

SE11・13 SE11は、SD9を掘り込んで検出され、掘形は径1.4mの円形で、深さは2.2mである。SE13は、SD10を掘り込んで検出され、掘形は1辺1.8mの方形で、深さは2.2mである。いずれも、素掘りの井戸で、井戸の底に井筒などは認められない。出土遺物は山茶碗などが多い。

SE17 SD18を掘り込んで検出された素掘りの井戸で、掘形は、径1.5mの円形で、深さは3.2mである。SE11・13と同様に、井戸の底に井筒などは認められない。山茶碗などが出土している。

6. 近世以降の遺跡

近世以降の遺構としては、掘立柱建物2棟・溝5条・井戸1基・土壇1基である。溝については、中世から近世以降までの陶器類が多く出土するところから、何等かの自然現象によって埋没したと考えられる。

(1) 掘立柱建物

SB6 東側発掘区中央からやや東で検出され、2間以上×1間以上の東西棟と推定され、全体規模は発掘区南壁により切られるため不明である。柱間は桁行1.8m、梁行は2.3mである。柱穴は径50~70cmの円形で、深さは60cmである。

SB7 SB6と重複して検出された。2間以上×2間以上の東西棟と推定されるが、発掘区南壁で切られているため全体規模は不明である。柱間は桁行1.8m、梁行2.3m、柱穴は径50~70cmの円形で、深さは50~60cmである。

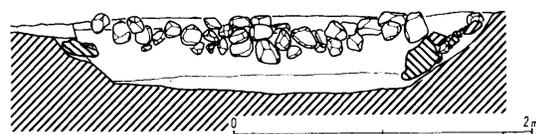
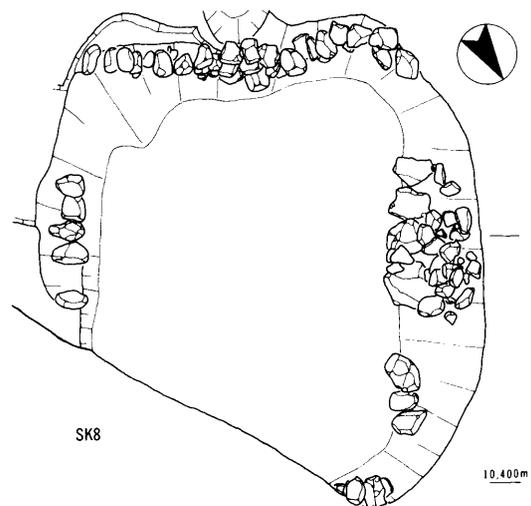
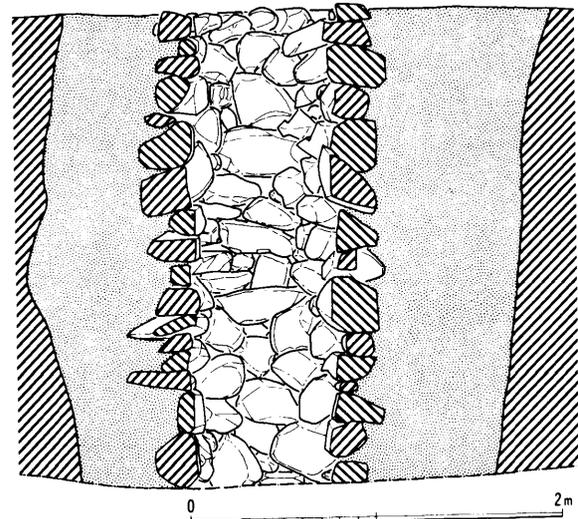
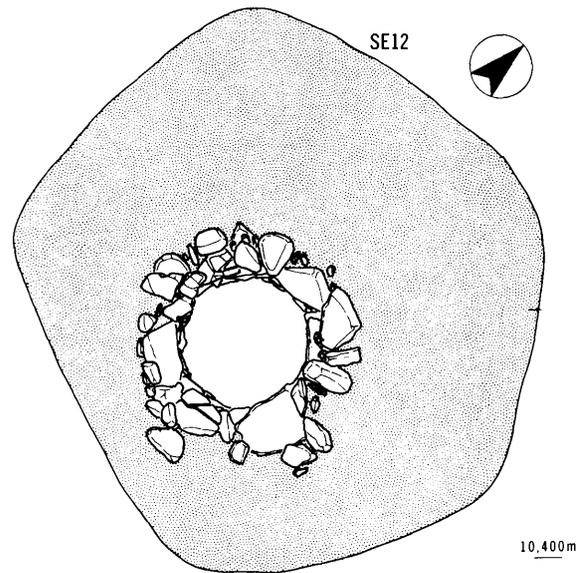
(2) 溝

SD1 東側発掘区東端付近で検出された溝で、L字形に屈曲して南から東へ走る。幅1.2~2.2m、深さ30~40cmである。

SD2・3 SD1と平行して検出された溝である。SD2は幅1.0~1.5m、深さ70~80cmで南北に走る。SD3は幅1.5m、深さ70~80cmであり、発掘区北壁付近で、東西に走る他の溝と直行している。

SD4 東側発掘区東端から西へ約30mに位置する大溝である。幅は最大で20m、最小で10.5mで、深さは1.5m以上である。

SD5 SD9・10のすぐ東側で検出された溝で幅は5.5m、深さは1.2~1.5mである。SD9・10が流れ込む形となっている。



第11図 遺構実測図(7) (上1:40、下1:50)

(3) 井戸

SE12 SE13のすぐ東側で検出された石組井戸である。井戸の掘形は、1辺2.0mの五角形を呈し、深さは2.5mで、埋土は暗褐色土である。石組に使用されている石は、不定形で、不揃いな自然石であるが、石の積み方は丁寧である。石組の外径は約1.2m、内径は70cmで、底まで平均している。井戸の底に井筒などは認められなかった。天目茶碗片などが出土している。

(4) 土壇

SK8 SE12に接して検出された土壇である。

1辺3.0～3.4mの方形を呈し、深さは50cmであるが、北辺を発掘区北壁で切られている。切られている北辺を除く3辺には、不定形で、不揃いな自然石による配石があり、また、東辺から、径5～6cm程度の丸い石が敷き詰められた幅1.0mの溝が東に向って延びている。恐らくSD5に注ぎ込む形になると考えられる。SE12とSK8は、相互に何らかの関係があるかも知れない。土師器片と近世陶器片が少量出土している。

VI 小 結

片野遺跡は、雲出川と波瀬川が合流する右岸の中段段丘上に位置し、行政上、一志郡一志町の片野・姫路両地区にまたがる広大な遺跡である。以前から畑地の表面には多数の遺物が散布しており、縄文時代から室町時代にかけての大複合遺跡として知られていた。今回の調査は、道路建設予定地域の限定された範囲ではあったが、各時代の遺構・遺物が確認され、存続時期は近世にまで下ることが明確となった。以下、簡単に各遺構をまとめて小結としたい。

1. 縄文時代

縄文時代の遺構としては土壇のみがあり、円形・不整な楕円形・方形などと様々である。これらの土壇は、発掘区の西端付近のみで検出された。時期的には、前期・後期に分けられる。特に口縁直下に突帯文を配し、体部に縄文を施した前期の深鉢が出土した土壇(SK112)は、他の土壇に比べ数段大きな規模を持つ。このような大規模な土壇は県下に於いても類例がなく、その性格については不明である。

2. 弥生時代

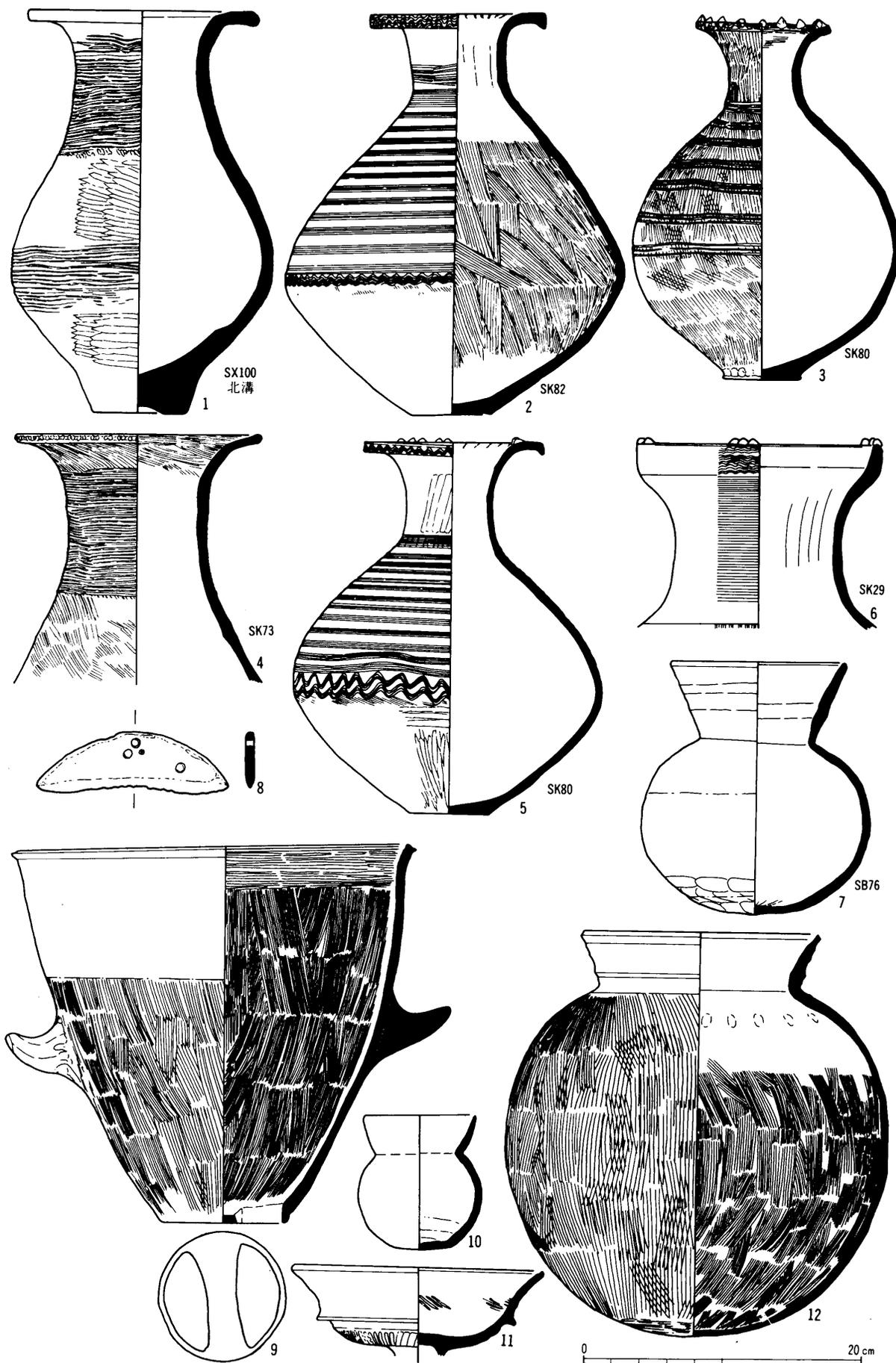
弥生時代の遺構としては、竪穴住居・土壇・溝・方形周溝墓がある。各遺構は西側発掘区のみで検出され、東側発掘区では検出されていない。西側発掘区では各遺構が割合平均して分布している。

一志町周辺で弥生時代の竪穴住居が検出されている例としては、白山町和遅野遺跡¹⁹、大角遺跡²⁰があり、

ともに中期であるが、一志町と嬉野町では今まで検出例がなく、今回の調査による検出が初例である。

竪穴住居は、西側発掘区のほぼ中央に集中しており、1棟を除き全てが重複しているが、時期的にみると、中期中葉と考えられる。そのうち、SB60～63は重複関係にあり、それぞれの新旧関係が判明している唯一の例である。各住居の方向は一定ではなく、逆時計廻りに住居が構築されている。4棟ともほとんど規模に差はなく、深さもほぼ同じであるところから、SB60～63は、建て替えの可能性がある。また、SB29を中心とする各住居も同様の重複関係をもつ。従って、内部構造などは不明である。

土壇は、弥生時代の遺構の中でも際立って多い。規模別にみると、大型の土壇は、西側発掘区東端付近の2基を除くと、そのほとんどが、西側発掘区の西約 $\frac{1}{3}$ に集中している。とりわけ、中期中葉を中心とする遺物が出土した土壇は、一定の方向を持っていると考えられる。例えば、SK77・81・82・84・89の長軸は、ほぼ南北であり、SK80・83・90の長軸は、ほぼ東西である。SK80からは、底部穿孔の第3様式の広口壺が壇底から10cmほど浮いた状態で2点が完形で出土しており、さらに、SK82からは同時期の広口壺1点が壇底から20cmほど浮いた状態で出土している。この2基の土壇はその規模に於いて大差なく、互いの方向性から、また、出土した土器を供献用と考え、さらに発掘区北側の未調査区域に



第12図 置物実測図 (1 : 4)

同規模の土壇が存在するとすれば、SK82を西溝とし陸橋部をもつ推定外径約11m、内径約9.0mの方形周溝墓とも考えられよう。

方形周溝墓として明確なものはSX100である。北西・北東・南西隅に陸橋部をもつが、各溝の規模はそれぞればらつきがある。北溝から供献用と考えられる第2様式の広口壺（朝日式併行）が底面から5cmほど浮いた状態で出土している。現在県内で検出されている方形周溝墓は第3様式以降のものに限られており、片野地区とは隣接する一志町小山地区の鳥居本遺跡²¹でも第3様式の方形周溝墓が1基検出されている。従って、今回の片野遺跡の例は、現時点で最も古い段階のものである。

その他の土壇群で、SK73・77・81・84・89は、それぞれ、供献用と考えられる広口壺の口縁部や底部などが出土しており、また、その形状・規模・方向性などを考え合わせると、土壇墓の可能性があるとすると、この周辺は、土壇墓と方形周溝墓が集中する墓域であったと想定されるのである。

溝は、SD45が他と比べて規模が大きく、発掘区のほぼ中央に位置しており、あるいは集落内を区画したものかも知れない。なお、SD45付近にも、溝や土壇が集中しているが、その性格は断定出来ない。

3. 古墳時代

古墳時代の遺構の特徴は、竪穴住居が弥生時代と比べ多数存在していることである。弥生時代の竪穴住居の大半が重複しているが、古墳時代の竪穴住居は重複するものと、単独のものが相半ばしている。各竪穴住居の時期的な細分は、出土遺物の詳細な検討を待たねばならないが、後期に属するものが多い。方位は南北軸でそう大差はなく、平面形態は正方形、隅丸方形、長方形に大別される。床面積は、最大25.5㎡から、最小11.5㎡までであり、特に大型の住居はなく、むしろ普通の規模（約20.0㎡前後）から小型（約13.0㎡前後）のものが主流を占めている。構造的には、4本の支柱穴とカマドをもつ例が約半数近くを占めており、この時期の特徴をよく表しているが、周溝が確認できたものはわずか2例にすぎない。

カマドはその大半が北壁中央付近に設けられ、その他は東壁、或いは西壁に位置する。カマド内からは土師器甕や甑が出土し、また、2棟（SB104・105）のカマド内に支柱石が残っており、貯蔵穴と推定されるピットや土壇を持つものが数棟ある。

古墳時代の竪穴住居のうち、住居内中央部、或いはその周辺に1辺0.8～1.6mの方形や方形に近い土壇をもつものが6棟ある（SB65・67・91・92・101・106）。土壇内からの遺物は微量であり、その性格は不明である。このような土壇を持った竪穴住居の類例は少なく、今後の類例の増加を期待し検討を加えていきたいと思う。

竪穴住居の分布を見ると、凡そ3つのグループに分けることが出来る。すなわち、西側発掘区から約1/4東を中心とするグループ、ほぼ中央に位置するグループ、さらに東端及び東側発掘区西端を含むグループである。西側のグループが最も住居数が多く、中央と東側のグループの住居数はほぼ同じである。しかし、住居数が多いとあって、西側のグループ周辺が中心とは断定できないが、東側グループの西に大溝（SD32）が南東～北東に走っており、東側発掘区に遺構が少ないことより、この大溝を区画のための溝と考えれば西側・中央グループが中心地域ではないかという想定は可能である。

4. 奈良～平安時代

奈良～平安時代の遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・土壇がある。

竪穴住居は、面積的が12.0～13.0㎡小型で、支柱穴や周溝は明確ではない。カマドはいずれも東壁に見られる。この竪穴住居はともに掘立柱建物の東、或いは北東部に隣接する様に位置しており、両者は何等かの関係があったのではないかと考えられるのである。

掘立柱建物は11棟あり、そのうち棟方向が明確なものは6棟（SB27・42・50・87・108・111）であり、その他は推定の域を出ない。6棟のうち4棟（SB27・50・87・111）が東西棟で、残り2棟が南北棟である。いずれも、棟方向に大差はない。掘立柱建物で最大のもは、SB87の5×3間（8.5×4.2m）であり、最小のものはSB42の3×2間（3.6

×3.2m)である。すぐ東に隣接する嬉野町平生遺跡でも、飛鳥・奈良時代から平安時代までの掘立柱建物が検出されており、²³その最大規模が、6×3間(13.0×6.4m)であるから平生遺跡の掘立柱建物と比べて小さいが、その他小規模なものを除くときほど大差はない。しかし平生遺跡が、その大部分に床束を持つのにに対し、片野遺跡の場合は床束を持たない。小規模な建物はともに倉庫と考えられる。発掘区中央で検出されたS B 36は、発掘区北壁で切られているために全体規模は不明であるが、妻側に廂がつく建物と考えられ、S B 87・111も同様に妻側に廂をもつと考えられる。発掘区内での掘立柱建物の分布は中央部分に5棟が集中し、西に行くに従い規模は大きくなるが、まばらになり、東に行くとき3棟が集中している。これだけで中央部分が、この時期の中心だと断定はできないが、全体規模不明ながらS B 43の柱穴の掘形は大きく、規模はかなりのものであり、主屋的な建物であったとも考えられる。

5. 鎌倉～室町時代

鎌倉～室町時代の遺構は、溝・井戸があるが、建物は検出されなかった。

溝は東西に走る2条(S D 9・10)を除き、全て南北に走っている。S D 51・55間の幅はやや広すぎるが、その他の溝の間の幅は1.0～2.0mであり、道路の可能性もある。S D 9・10とS D 14・15とは、恐らく南側未調査部分でつながるかも知れない。

井戸は3基であるが、いずれも素掘りで、掘形についてはほとんど差はなく、井戸の底には井筒などは認められない。この様に生活の重要な要素を占める井戸が東側発掘区で集中して検出されたということは、建物は検出されなかったが、生活の場が東へ移って来たことを推定させる。

6. 近世以降

近世以降の遺構は、掘立柱建物・井戸・土壇・溝であるが、これらは全て発掘区東端付近にある。

井戸(S E 12)は石組で、掘形は他の井戸よりも大きく、平面は五角形を呈している。井戸に接して3辺に石を配列した土壇(S K 8)があり、さらに土壇の東辺からS D 5に向う拳大の丸い石を敷きつ

めた溝があり、これら井戸と土壇、溝とは相互に関連のある施設と考えることができよう。S D 5の東に掘立柱建物があり、この周辺に生活の中心があったのであろうか。

以上、各遺構を時代ごとに概観してきたが、遺構の分布状況から集落の移り変りを考えてみたい。

縄文時代の遺構は発掘区西端付近に集中し、住居は検出されなかったが、確実に前期及び後期に生活の場があったことを想定させる。

弥生時代になると、生活の場は東へ移り、墓域をもつ集落へと発展し、中期を中心として営まれるようになる。

古墳時代になると、竪穴住居の数が増え、集落の規模が拡大され、後期を中心として営まれている。

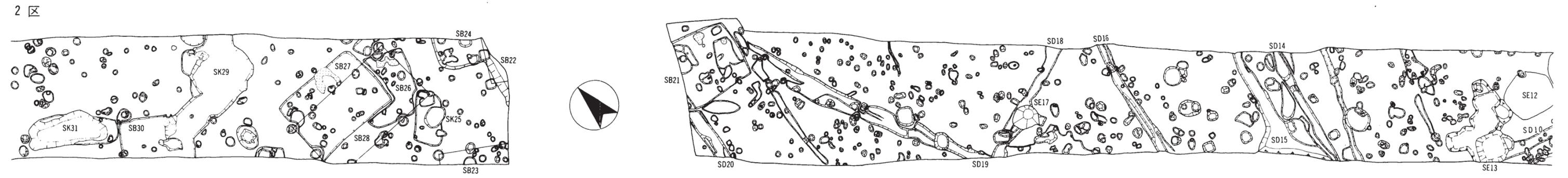
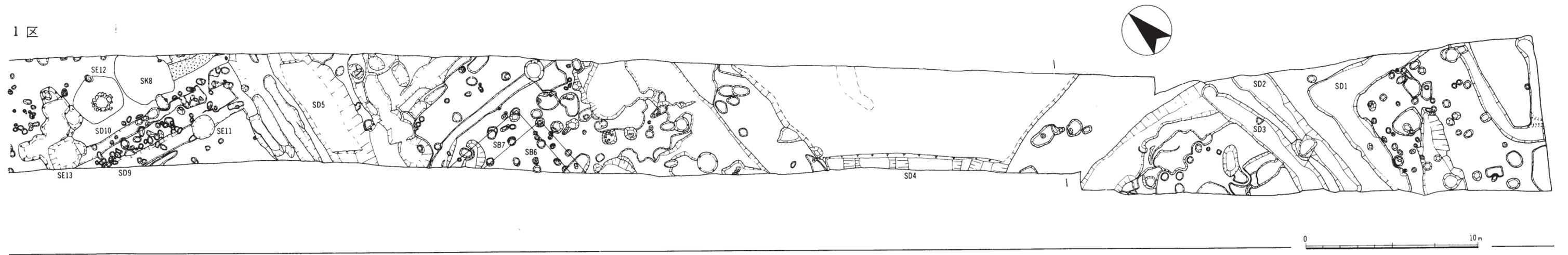
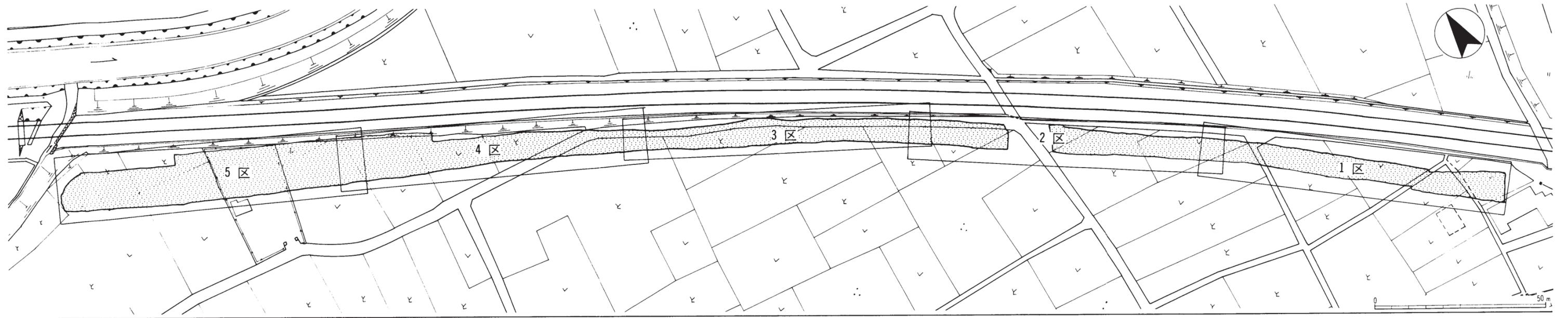
奈良～平安時代にも古墳時代と重なる場所で、竪穴住居、掘立柱建物が存在することから、引き続き生活の場が存続したのであろう。

しかし、鎌倉～室町時代になると、さらに東へ移動しており、近世には生活の主体が東を中心とした地域に営まれるようになる。これは、現在の片野地区の集落とも重なっているのである。

[註]

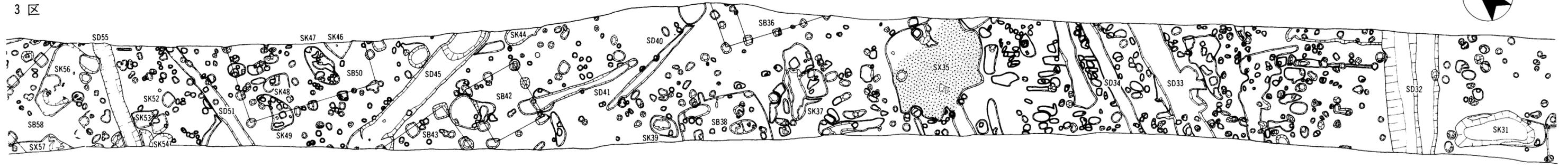
- ① 新田洋 「蛇亀橋遺跡」 『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1982
- ② 谷本鋭次 『中ノ庄遺跡発掘調査報告』 三重県教育委員会 1972
- ③ 山沢義貴・谷本鋭次ほか 『上野遺跡・上野山古墳群発掘調査報告』 一志町教育委員会 1971年
- ④ 稲生進一・吉村利男 『鳥居本遺跡発掘調査報告』 一志町教育委員会 1975年
- ⑤ 「一志郡筒野・西山両前方後方墳について—三重県主要古墳調査」 『ふびと20号』 三重大学歴史研究会原始古代史部会 1963年
- ⑥ 註⑤参照
後藤守一 「伊勢一志郡豊地村の二古式古墳」 『考古学雑誌14—3』 1923年
- ⑦ 「一志郡向山前方後方墳について—三重県主要古墳調査」 『ふびと27号』 三重大学歴史研究会原始古代史部会 1967年
榎本亀次郎 『三重考古図録』 1954年
註⑥の後藤論文
- ⑧ 小林行雄 「同范鏡考」 『古墳時代の研究』 1961年
- ⑨ 註③参照
- ⑩ 山田猛 「天花寺廃寺遺跡」 『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1981年
- ⑪ 註④参照
- ⑫ 服部貞蔵・吉村利男ほか 『平生遺跡発掘調査報告』

- 平生遺跡調査団 1976年
- ⑬ 早川裕己 「堀田遺跡」 『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1982年
- ⑭ 池辺彌 「増訂版和名類聚抄郷名考證」 1970年
- ⑮ 弥永貞三・谷岡武雄編 『伊勢湾岸地域の古代条里制』 1979年
- ⑯ 大西源一・鈴木敏雄ほか 『一志郡史・上巻』 一志郡町村会 1955年
- ⑰ 『神宮雜例集』・『神鳳抄』 正編群書類従・第1巻一神祇部
- ⑱ 『三重の中世城館』 三重県教育委員会 1976年
- ⑲ 稻生進一 「和遅野遺跡発掘調査報告」 白山町教育委員会 1975年
- ⑳ 本堂弘之 「大角遺跡発掘調査報告」 白山町教育委員会 1983年
- ㉑ 山岸良二 「三重県の方形周溝墓」 『三重考古』 創刊号 1975年
第11回埋蔵文化財研究会 『西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題』 1982年
- ㉒ 註④参照
- ㉓ 註⑫参照

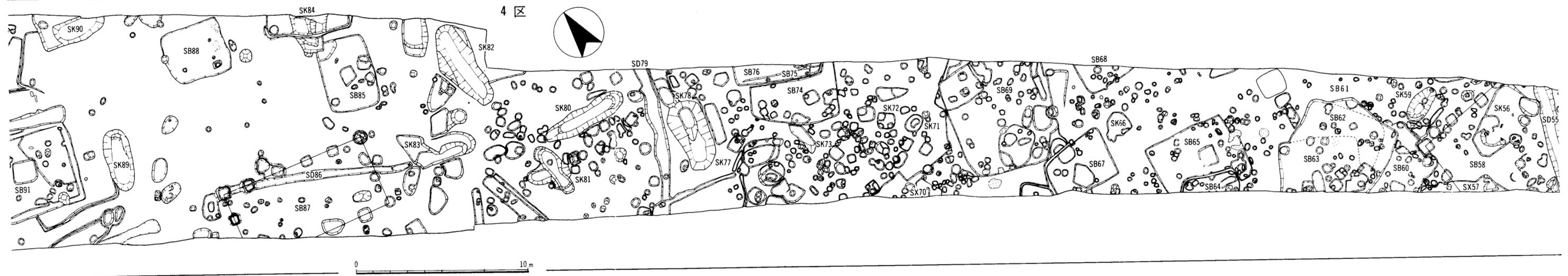


第13図 遺構平面図(1) (1:200) 1/2 (上)

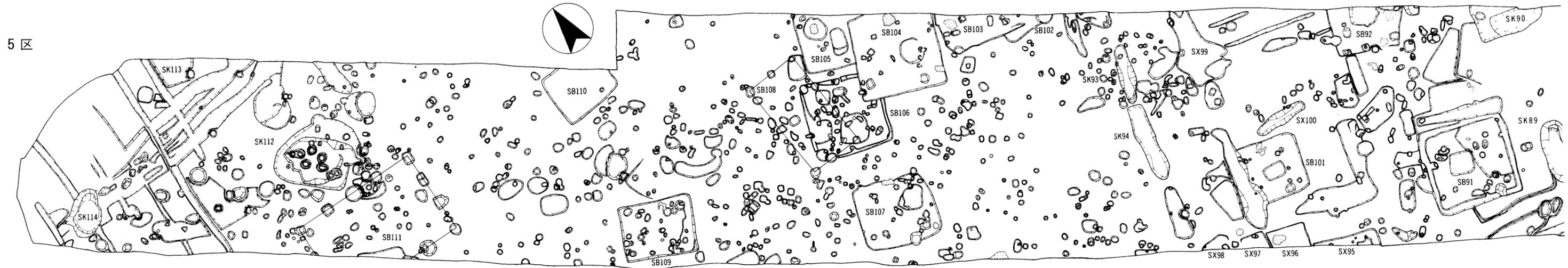
3 区



4 区



5 区



第13図 遺構平面図(2) (1:200)

図 版



遺跡全景（東から）



調査風景

PL 2



1区東部（西から）



1区西部（西から）



SB21 (南から)



2区東部 (西から)

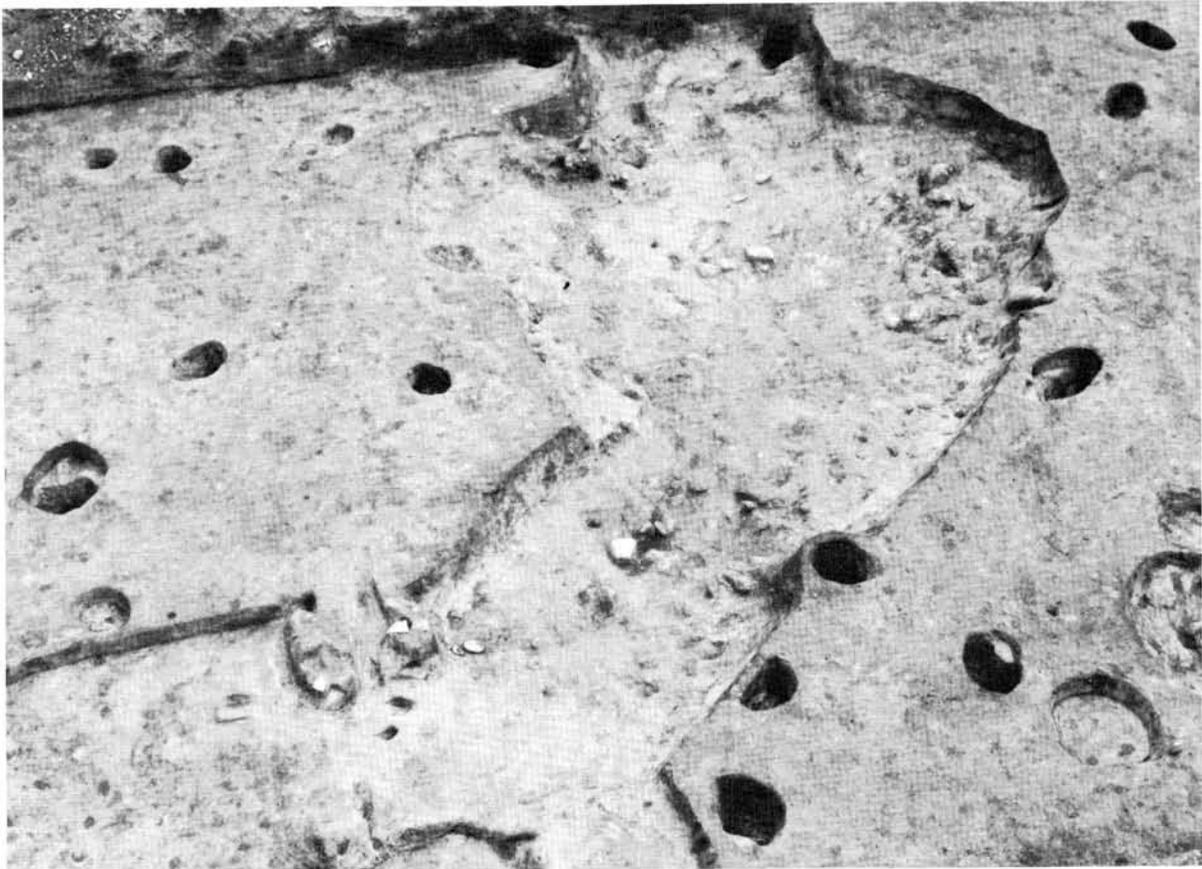
PL 4



SB27 (南から)



2区西部 (東から)



SK29 (南から)



SD32 (西から)

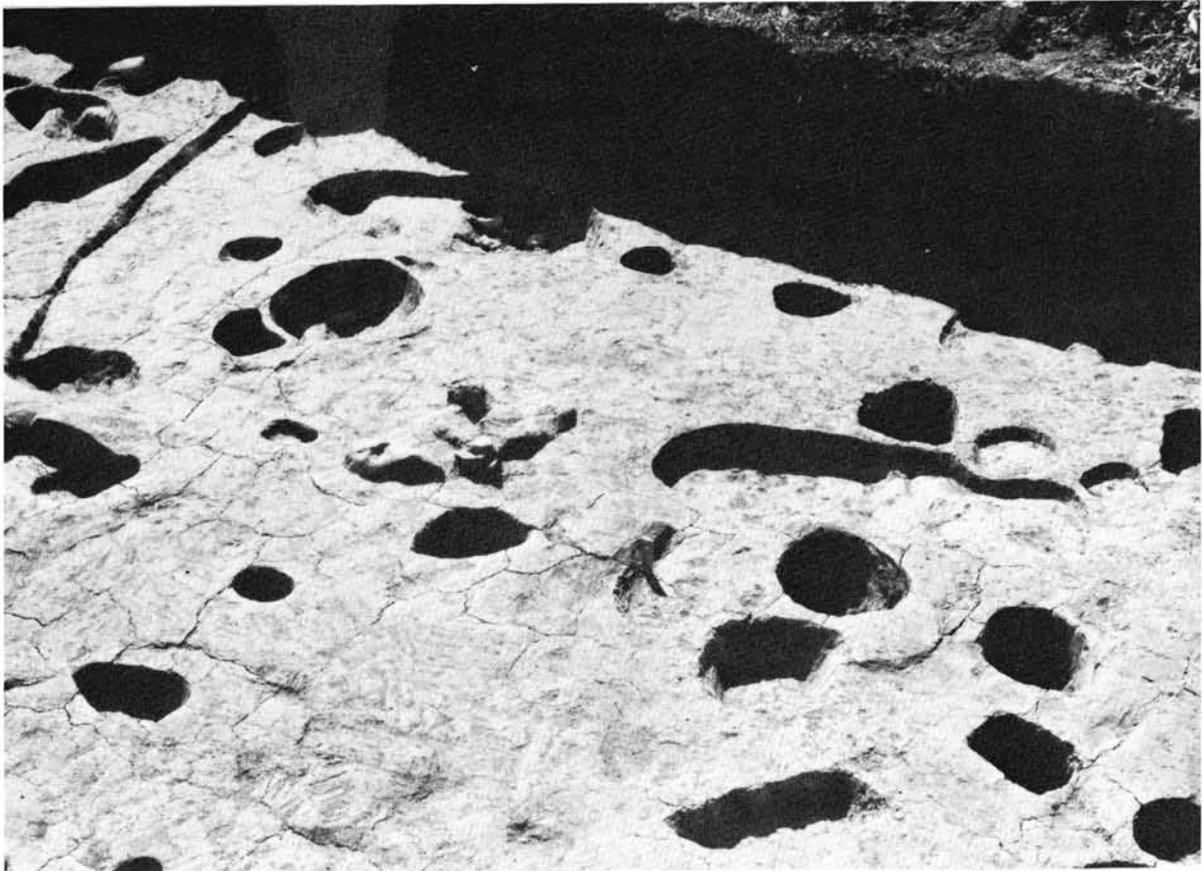
PL 6



3区 (西から)



SX35 (西から)



SB38 (北から)



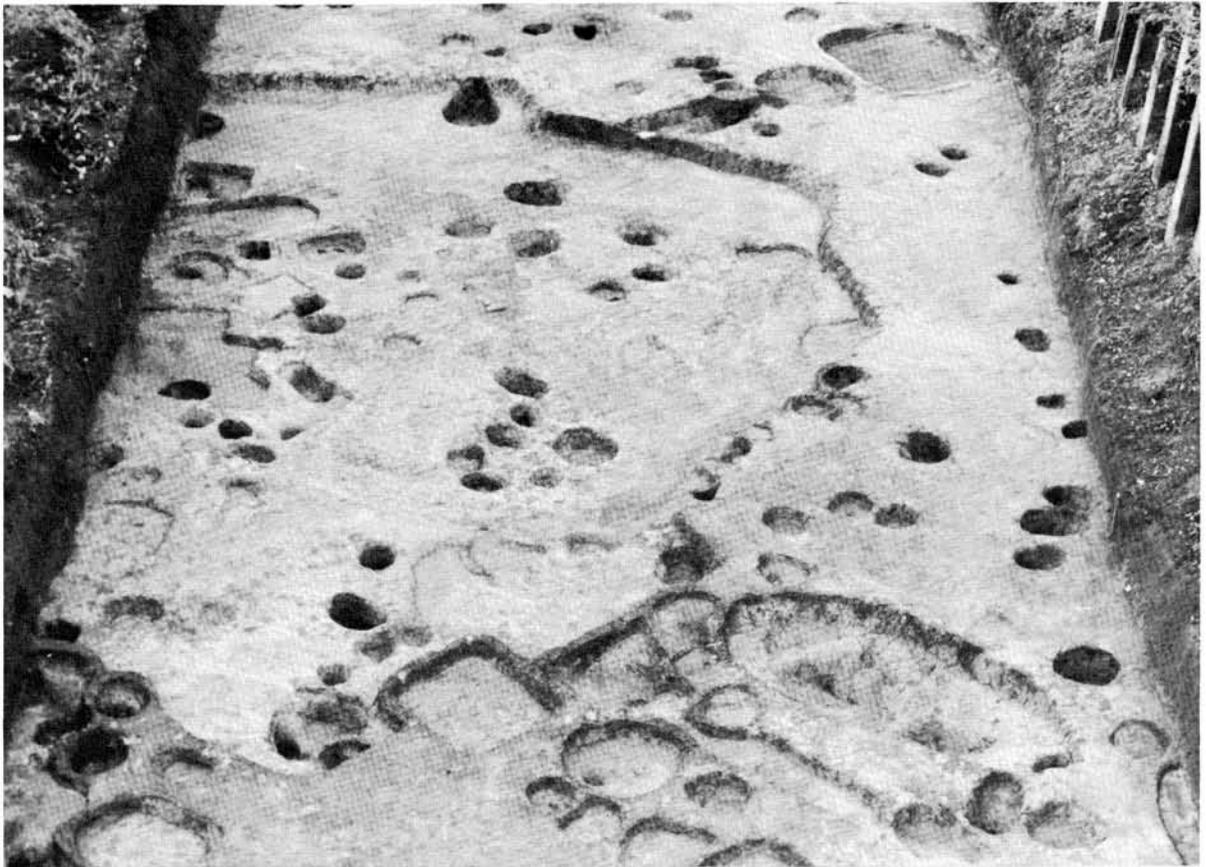
SB42・43 (東から)



SD45、SB50 (東から)



4区 (西から)



SB60~63、SK59 (東から)



SB64・65 (南から)

PL10



SB69 (南から)



SB74~76、SK73 (南から)



SK77 (南から)



SK80、SD79 (南から)

PL12



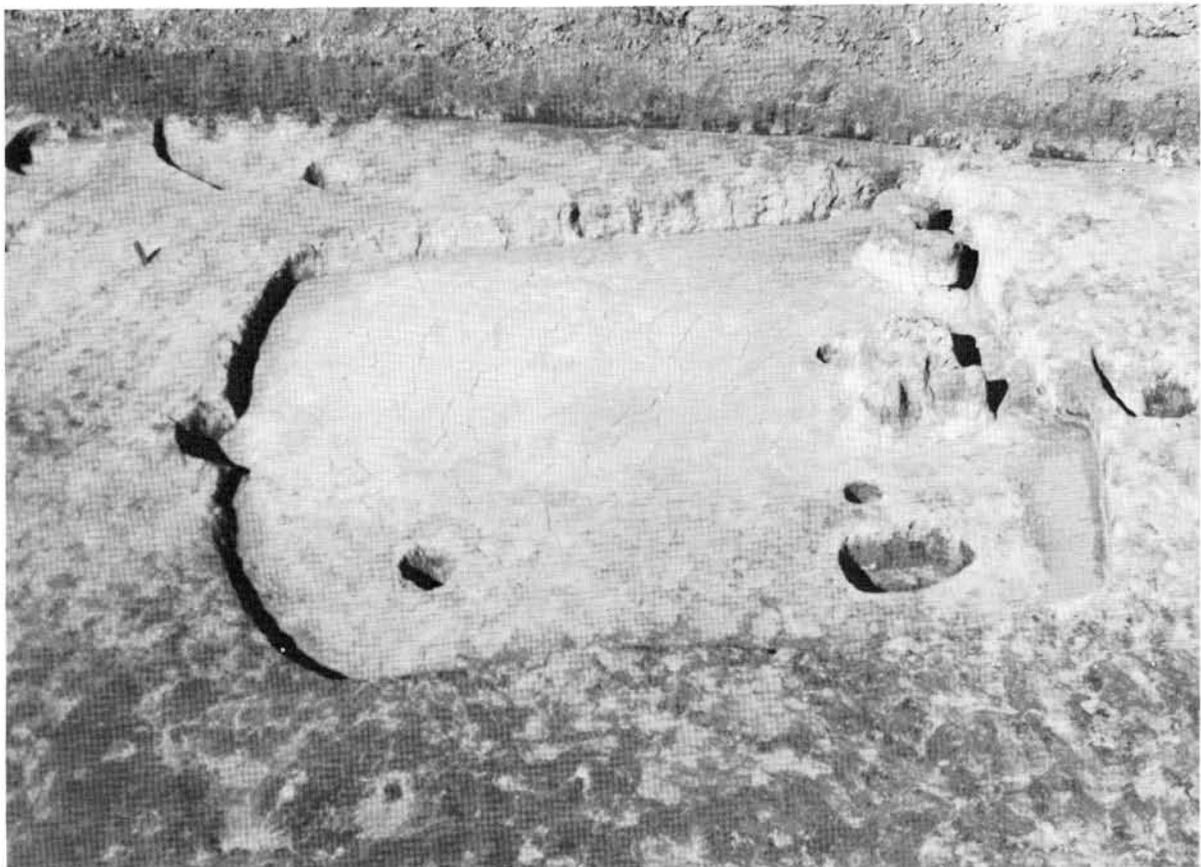
5区東部（西から）



SB85（西から）

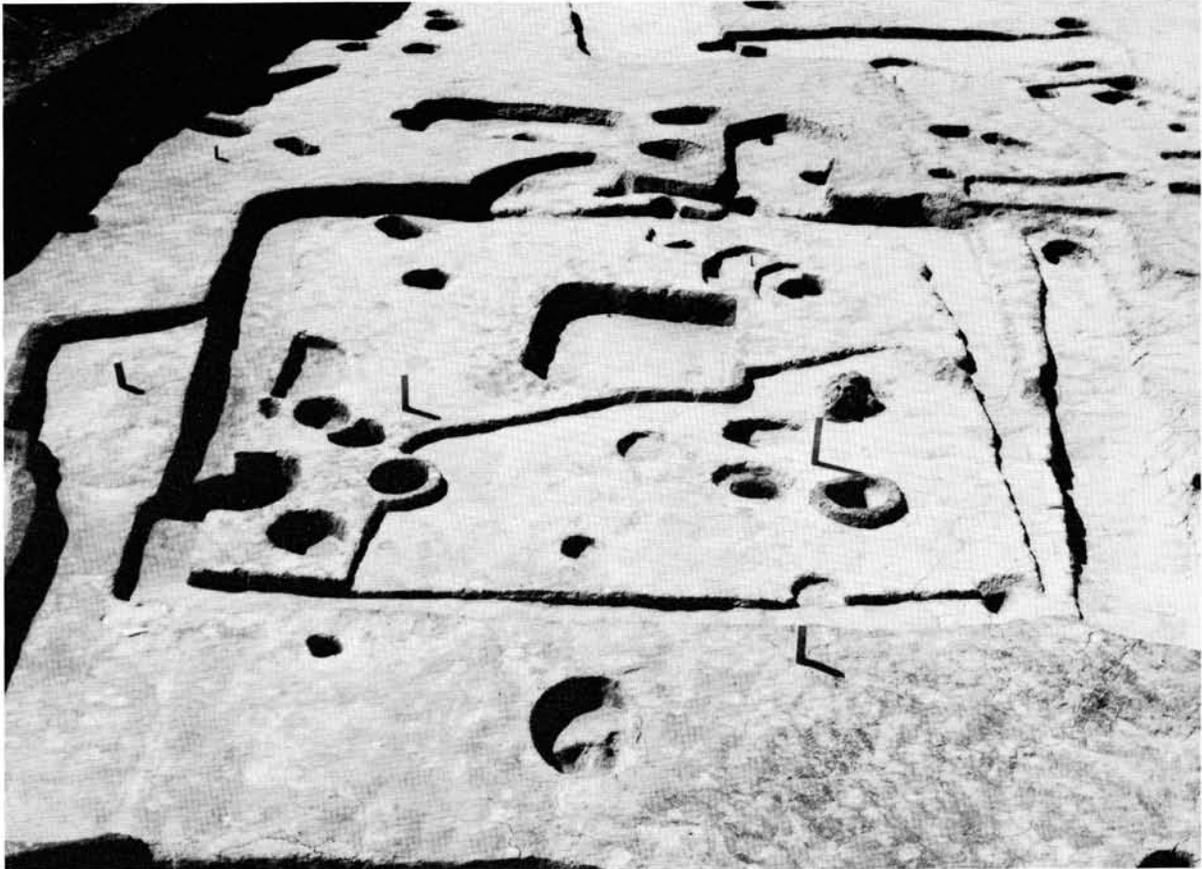


SB87、SD86 (東から)



SB88 (南から)

PL14



SB91 (東から)



SX100、SB101 (東から)



SB104 (南から)



SB106・108 (東から)

PL16



SB109 (北から)



5区西部 (東から)

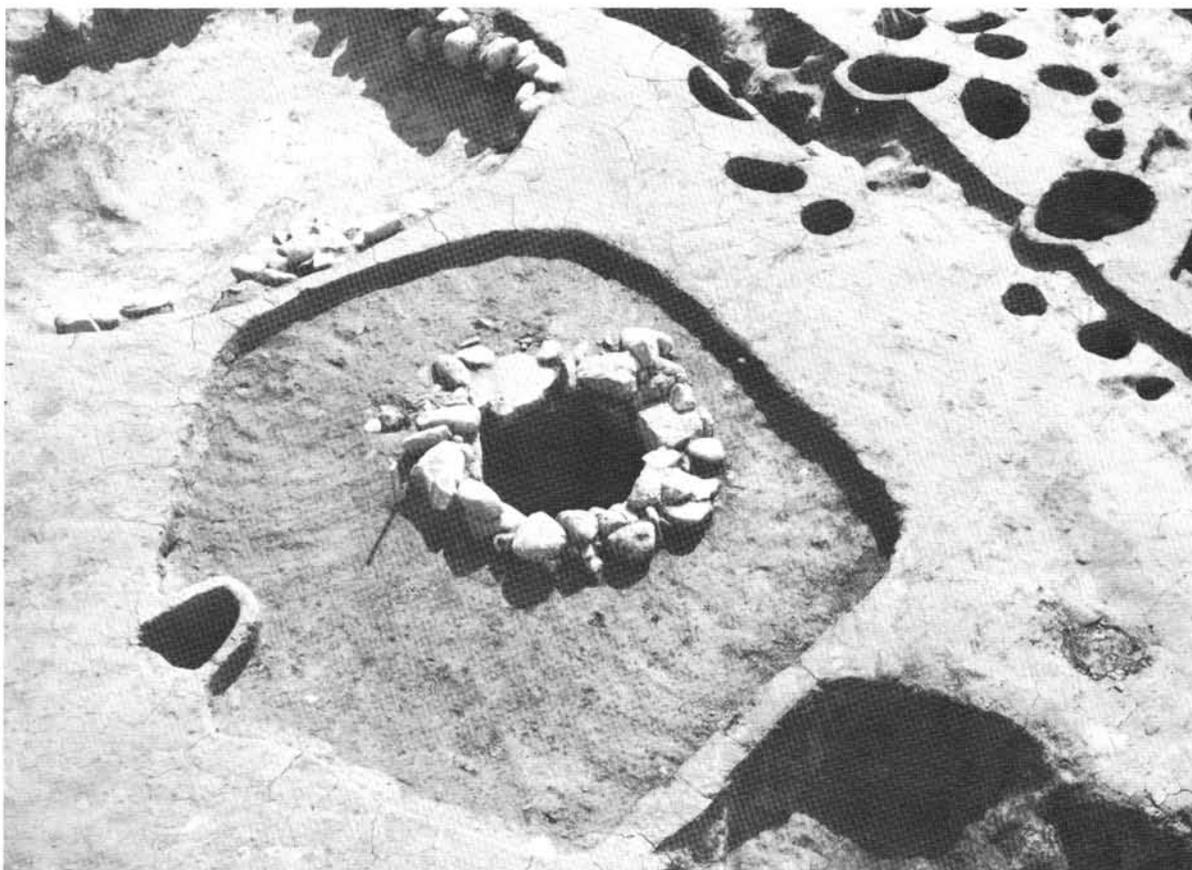


SD5 (西から)



SK8 (南から)

PL18



SE12 (北から)



SE12 (東から)

昭和60(1985)年3月に刊行されたものをもとに
平成17(2005)年4月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告

片野遺跡発掘調査報告

1985年3月

編集 三重県教育委員会
発行

印刷 オリエンタル印刷
